

復文の地平

——失はれた学習法の復活を目指して——

古田島洋介*

だれしも英語の学習で整序問題に取り組んだ経験があるだろう。呈示された日本語の文意に合致するやう、与へられた単語を並べ換へ、語序を整へる問題である。英語の構文を再確認し、語法・文法の知識を的確に応用すべく、きはめて有益な練習だ。たとへば次のやうな問題である。

友だちと一緒にパーティーに行きました。

a, friends, with, to, party, went, some, I

まづは主語と動詞を考へる。和文では主語が省略されてゐるが、常識に照らして「私」が動作の主体であらうから〈I〉を主語とし、動詞は〈go〉の過去形〈went〉を選ぶ。これで構文の骨格「(私は)……行きました」すなはち〈I went〉が完成だ。仰々しく言へば、第二文型〈SV〉を組み上げたわけである。そして「前置詞十名詞」の知識を応

用し、「友だちと一緒に」は〈with friends〉、「パーティーに」は〈to a party〉とする。ただし「これでは〈some〉が使はずじまひのため、複数名詞〈friends〉と結びつけよ」〈with some friends〉としたい。残る問題は二つの副詞句〈to a party〉と〈with some friends〉を並べる順序だが、動詞〈went〉との意味上の関連に鑑みて、行つた場所を先に記したほうがよからうと判断する。かくして整序が終了、左のごとき正解が得られるわけだ。

I went to a party with some friends.

むろん、さらに細かく見れば、〈a party〉には「冠詞十名詞」〈some friends〉には「形容詞十名詞」といふ知識が応用されてゐる。そもそも個々の単語の意味がわからなければまづたくお手上げなのは、言ふまでもないことだ。

きはめて初歩的な問題とはいへ、右のやうに、かなりの数にのぼる基礎知識を動員しなければ整序問題は解けない。このやうな練習を積み重ねてこそ、英作文へと歩みを進めることができるのだ。しかも、これは英文を「書く」ためだけの練習にとどまらない。英文を「読む」ための練習としても有意義だらう。いかなる単語がどのやうに組み合わせられて意味のまとまりを成し、さらに、それぞれの組み合わせがどのやうに排列されて英文全体が組み上げられるのか、はつきり理解できるやうになるからである。英文の閲読にさいして、意味の区切りと全体の構成が明確に目に映ってくる——この効用は何人も否定し得ないだらう。もつとも、最近、不当にも文法の学習を嫌ふ風潮のなか、かうした整序問題を課す機会が、以前に比べると著しく減少してきてゐるらしいが。

ただし、ここで英語の学習法の来し方行く末を見渡して憂慮の念を吐露しようといふわけではない。事は漢文の学習法に係る。整序問題に似る学習法が漢文にもあるのだ。いや、あつたと言ふべきか。今やほとんど滅びてしまった漢文の学習法——それが復文と呼ばれる作業である。

一 復文とは何か

復文とは「仮名交りに書き下した漢文を原文にもどすこと」(『広辞苑』第五版)である。つまり、漢文訓読の結果として得られた書き下し文から、再び原文たる漢文を復原する練習だ。「復文」の二字そのものは、レ点を打つて「復^レ文」とし、書き下し文をもどすのだから「文を復す」とも、もとの漢文にもどすのだから「文に復す」とも訓読できる。もつとも、後者の場合でも、原文を復原すると考へれば、やはり「文を復す」と訓じて差し支へない。たぶん、「文を復す」のほうが穏当な訓読だらう。

具体的には、たとへば書き下し文「我 汝を愛す」を与へられ、「計三字」と指定されたら、漢字を漢文本来の語順に並べ換へ、三字から成る原文「我愛汝」を復原してみせるわけだ。返り点・送り仮名の付け方をも確認したいとなれば、訓読文「我愛^ス汝^ヲ」に復原してもかまはない。要は、原文の語序だ。原文そのものにせよ訓読文にせよ、原文の語順さへ復原されれば、復文の目的は果たされる。

かうした復文は、遅くとも江戸時代は元禄年間の初期、すなはち十七世紀末には漢文の学習法として成立してゐたらしい。元禄三年(一六九〇)に成った伊藤東涯『刊謬正俗』(寛延元年(一七四八)刊)附録「訳文法式」に見える字句が、その証拠である。この「訳文法式」とは

書き下し文を用ゐた復文練習を指し、東涯は「其式有三」(其の式三有り/三つの要素がある)として、「原文」「訳文」「復文」を挙げてゐる。「原文」は、いはゆる白文を指す。「訳文」とは、今日に謂ふ書き下し文のこと。いづれについても、詳細は次節に譲る。そして、「復文」に關しては左のやうに説明する。書き下し文を添へておかう。

復者就訳文以漢字複写、照数銷注訖、以原本一一査対、朱書于傍、驗其中否。

復する者は、訳文に就いて漢字を以て複写し、数に照らして銷注^{ちゆうそ}し訖^そはれば、原本を以て一々査^さ対^{たい}して、傍らに朱書し、其中^{ちゆうちゆう}りしや否やを驗^{けん}す。

「訳文」は、右に述べたごとく、ここでは書き下し文の意である。「銷注」は、消し去ることと注ぎ入れること。つまり、字句を抹消または挿入して増減し、全体の字数を調整する作業をいふ。「査対」は、突き合はせて調べる意。要するに「書き下し文に基づいて漢字で原文を再現し、字数の調整が完了したら、原文と一字づつ照らし合はせて、自分の復文のわきに書き込み、正しく復文できたかどうかを調べる」と言ふのだから、現代の我々が承知してゐる復文練習と同内容であることは間違ひない。

ただし、元禄年間以来、復文がいづれの漢学塾でも盛んに行はれ、一貫して「復文」といふ字遣ひと名称を以て呼ばれてゐたのかとなると、多少の留保が必要のやうだ。二つの資料を挙げてみよう。

第一に、復文を漢作文の練習法として重要視する山本北山『作文志毅』(安永八年(一七七九)刊)に次のやうな字句が見える。

文章を作らんと思はば、善交の友二三、若は四五人と結社し、月に四五回の会日を期め、各々訳文を携来て覆文すべし。訳文とは、古人の文を国字にて訳したるなり。覆文とは、訳文を原文に覆す云ふ。(傍点は引用者)

「原文」は、ルビこそ「ほんもん」(本文)となつてゐるが、文字どほり原文のこと。「訳文」は、東涯「訳文法式」に同じく、書き下し文を指す。ただし、「国字にて」とあるからには、すべて仮名で記した書き下し文かといふと、実際は漢字片仮名交じり文を意味してゐるやうだ。その字句は、次節で紹介することにした。

問題の復文は「覆文」と記されてゐる。「かへす、もどす」意では、「覆」も「復」に通じて同義に用ゐることができ、特に論ずべき点はないかのやうだ。単なる字遣ひの違ひにすぎぬ、と。しかし、結果としてはさうだとしても、もしかすると北山の「覆文」は「射覆」といふ語を踏まへての用字であつたかもしれない。その可能性を示唆するのが、次に掲げる『習文録』の「題言」の字句である。

第二に、復文練習用の原文と書き下し文とを載せる皆川淇園「編」『習文録』初編(寛政十年へ一七九八)刊に、門下生で「浪華」すなはち大坂の人物たる葛西欽が寄せた安永三年(一七七四)の「題言」がある。そこに左のやうな字句が見えるのだ。その年(安永三年)の秋、葛西が再び京都に上つて淇園の漢学塾を訪れたところ――

塾課に近ごろまた射復文と云ふものを作す。其事、甚だ文を習ふに便なるを以て、諸生競てこれを為す。其法、漢人の記事百言上下の

文をとりて、これを読み、其読声の片仮名を用て写して数紙として、人々にこれを与て、これに依りて其原文の字を射復せしむ。射復略就りて、原文の字数に合せて、字を増減し、増減定まりて後、原文に比按して、其文字の中否を校し、中ること多きを上第とし、失すること多きを下第とす。(傍点は引用者)

この一節が復文練習の実況中継であることは言を俟たないだらう。「漢人の記事百言上下の文」つまり中国人が書いた百字前後の漢文を原文として、その読み方を片仮名で写し、それに基づいて復文を行ふ。そして、原文の字数に合はすべく字句に添削をほどこし、その作業を終へたら、「原文に比按して」すなはち原文と照らし合はせて、正確に復文できたか否かを確認し、原文と一致してゐる字が多ければ優等生、ろくに一致してゐなければ劣等生といふ具合である。

まづ注意しておくべきは、冒頭の部分だ。大坂の葛西欽が再び京都に上つて淇園の漢学塾を訪れ、そこで目にしたのが「塾課に近ごろまた射復文と云ふものを作す」といふ光景だつた。語気文勢から推して、このとき初めて復文といふ練習法の存在を知つたと考へてよいだらう。ここに見える仮名書きの「また」は、「再び」の意味ではなく、新たな事態に対する驚きを表はして言ふ「また」かと思ふ。葛西の「題言」全体を見渡しても、かつて行はれてゐた復文練習が最近になつて復活したとの意味合ひを帯びた字句はない。さうだとすれば、ここから二つの事実が推測できるだらう。

一つめは、淇園の漢学塾で復文練習が始まつたのは、安永三年(一七七四)から見て「近ごろ」と呼び得るやうな時期であつたらしいといふ事実である。おほよその見積もりで言へば、安永元年(一七七二)ごろ

のことであつたらうか。先に紹介したとほり、すでに伊藤東涯が『刊謬正俗』の附録「訳文法式」に「復文」に関する説明を記してゐたが、その成書年すなはち元禄三年（一六九〇）から起算すれば約八十年後、その刊行年すなはち寛延元年（一七四八）から計算しても約二十五年後のこととなる。どうやら復文といふ練習法は、十七世紀末ごろから全国の漢学塾で一斉に行はれてゐたわけではなく、ゆるやかに広まつていつたもののやうだ。

二つめは、右からただちに推測されることであるが、復文練習を取り入れる時期には個人差・地域差があつたといふ事実だ。なにしろ、伊藤東涯（一六七〇～一七三六）も皆川淇園（一七三四～一八〇七）も京都の人である。その同じ京都のなかでも、普及（と呼べるか否か疑問の余地も残るが）にはこれだけの時間がかつたのだ。そして、京都とは異なり、安永三年（一七七四）の時点において、大坂では未だ普及と言へるやうな状態には達してゐなかつたのだらう。だからこそ、大坂の葛西欽が「題言」のなかで、京都で目にした復文練習のありさまをことさら詳述する次第となつたわけである。

想へば、「東都」すなはち江戸の山本北山（一七五二～一八一二）が『作文志藪』で復文の方法を説いたのは、安永八年（一七七九）のことだつた。葛西欽が安永三年（一七七四）に京都は皆川淇園の漢学塾における復文練習のありさまを報告してゐることと合はせ見れば、復文は安永年間（一七七二～八一）に、京都と江戸において、初めて漢文学習法としての体裁が整へられたのかもしれない。

次に注意すべきは、復文の呼称である。葛西欽は復文を「射復文」と呼び、その作業を「射復」と称してゐる。「題言」では、他の箇所でも「射復」の語が数回にわたつて繰り返されてをり、葛西が「射復」の二

字を以て復文を呼んでゐたことは間違ひあるまい。

けれども、この「射復」は耳慣れぬ漢語で、各種の漢和辞典とも載録してをらず、国語辞典の類にも見当たらない。中国の『佩文韻府』や『漢語大詞典』も載せてゐないのである。これが皆川淇園の漢学塾における用語であつたのか、初めて復文を目にした葛西欽の手に成る造語なのかもわからない。ただし、淇園の用語にせよ、葛西の造語にせよ、この二字の由来を推測させる記事が、やはり前引の葛西欽「題言」中に見える。葛西は「題言」の末尾で「射復」の「五つの鴻益」すなはち復文練習がもたらす多大な効果を五条にわたつて列挙してゐるが、その第四条は次のやうな字句である。

窮郷僻邑きゆうきやくせきいふの士、文章に志しあれども、良師に乏しきものは、此冊（1）（皆川淇園『習文録』）誠に諄誨じゆんけいの良師に比すべし。又閑居遁処かんにょとんじょの人或は読書に倦あひたる時は、此冊真に嘉告かこくの好友に充つべし。若又朋友（4）の集会する時には、此冊に射覆せふくして酒令とも作すべし。

最後の一文に注目していただきたい。「もし友人どうしが集まつたりしたときには、この『習文録』を素材として『射覆』し、酒宴の遊びとすることもできるだらう」と言ふのである。「射覆」とは、覆つてある物を射あてる遊戯にほかならない。要するに、葛西は「復文は友人どうしの酒席の余興としても使へる」と言つてゐるわけである。思ふに、「射復」は、この「射覆」をもちつた語なのではなからうか。器などで覆はれた物を射あてるのが「射覆」ならば、仮名に覆はれた漢字を射あつて原文を復原するのだから「射復」と称してよからう——これが「射復」といふ語の由つて来たるところではないのか。翻つて愚考するに、北山が復

文を「覆文」と記した裏にも、「射覆」の語がちらついているたのではあるまいか。さうだとすれば、北山の「覆文」は、単なる「復文」の書き換へではなく、ひよつとすると「射覆文」の略称だったのかもしれない。ともあれ、葛西が復文を「射復(文)」と称してゐるのは紛れもない事実だ。これを見ても、伊藤東涯の「訳文法式」以来、復文は決して急速かつ着実に普及したわけではないとわかるだらう。安永三年(一七七四)の時点でも、呼称すら不安定だったのである。

なほ、復文の呼称について触れたついでに、葛西欽が「題言」のなかで書き下し文を「読譜」と呼んでゐることも紹介しておきたい。前掲の復文作業の記述に「これを読み、其読声の片仮名を用て写して教紙として」といふのがそれである。書き下し文の体裁については次節で言及することとし、ここでは取り敢へず伊藤東涯「訳文法式」・山本北山『作文志教』・皆川淇園「編」『習文録』に見える呼称を、現行の呼称と対比して整理しておかう。三者とも今日に謂ふ原文は、同じく「原文」と称してゐる。

・東涯	：訳文	復文
・北山	：訳文	覆文
・淇園	：読譜	射復(文)
[現行]	：書き下し文	復文

二 復文の実態

それでは復文の実態を観察してみることにしよう。ただし、我が怠慢と調査不足により、手にしてゐる資料の種類は乏しい。前節で名を挙げ

た書籍に若干の資料を補ふにとどまる。そもそも復文は漢文学習者が行ふ練習にすぎなかつたため、ある程度の実力さへ身に着けば、もはやお払い箱となつてしまひ、資料が残りづらものと推測される。とはいへ、数種の資料に徴するだけでも、復文練習のあらまは想像できるだらう。まづは江戸時代、次いで近代の復文課題を観察してみることとする。甚だ粗雑ながら、復文の簡略な歴史としても役立つ点があらうかと思ふ。

◆江戸時代1 伊藤東涯「訳文法式」 *元禄三年(一六九〇)成書

復文練習には、素材となる原文を選び、その書き下し文を提供することが不可欠だ。東涯は、まづ「原文」の選定について、次のやうに述べる。書き下し文を添へておかう。

先将唐宋以来諸名家文辞理精鬯者、一二百字至五六百字、長者節之、短者全之、定為原文。凡貴融粹、不取佶屈。訳人、臨時旋定。先づ唐宋以来諸名家の文の辞理精鬯なる者を將て、一二百字より五六百字に至るまで、長き者は之を節し、短き者は之を全くし、定めて原文と為す。凡そ融粹を貴び、佶屈を取らず。訳人、時に臨んで旋り定む。

趣旨は明快だらう。「唐宋以後の名だたる文人が遺した理解しやすい文章を選定し、〈訳人〉すなはち訓読担当者に持ち回りで訓読をほどこさせる」といふわけである。

驚くのは、原文の字数だ。最短でも一百字の原文を選ぶのだから、今日の目で見れば、かなり負担の重い復文作業であつたと言へるだらう。

ただし、学問と言へば漢文学習を意味した当時にあつては、「少なくとも一百字くらゐの復文作業は当然だ」との感覚だつたのかもしれない。次いで、東涯は「訳文」すなはち書き下し文について、左のごとく説明する。

仍就原文、以国字換写〔割注〕凡原字平易易知、不劳思索者、直楷書本字。不必一一換写。有助辞、随数加圈子〔割注〕国訓、多不読助字、故如矣也焉耳等字者加圈。如之乎於而等、嵌在句中者、不必加圈。該量原字若干、注其数千左。毎月三次或六次、随時定。仍つて原文に就いて、国字を以て換へ写す〔割注〕凡そ原字の平易にして知り易く、思索を勞せざる者は、直ちに本字を楷書す。必ずしも一々換へ写さず。助辞有れば、数に随つて圈子を加ふ〔割注〕国訓、多くは助字を読まず、故に「矣・也・焉・耳」等の字の如き者は圈を加ふ。「之・乎・於・而」等の如く、嵌めて句中に在る者は、必ずしも圈を加へず。原字若干を該量し、其の数を左に注す。毎月三次或いは六次、時に随つて定む。

冒頭の「仍」は「そのうへで」。「まづは原文を選び、そのうへで書き下し文を作成する」との意である。これも一読して趣旨は明快、「原文を書き下し文に改め、その左に復文すべき字数を注記し、一カ月に三回または六回の復文練習に及ぶ」といふわけだ。

問題は、書き下し文の体裁である。今日の書き下し文は一般に漢字平仮名交じりで記すが、東涯は仮名文字のみによる書き下し文を基本としてゐたらしい。それを窺はせるのが一つの割注の字句である。念のために訳しておけば――

原文の字が平易で察しやすく、特に考へをめぐらす必要もないやうな箇所については、いづれもそのまま漢字で記してしまふ。原文の字をすべて仮名に書き換へるには及ばない。

つまり、書き下し文は仮名で記すことを原則とし、原文の字が容易に察せられ、ほとんど練習にならないやうな部分については、のつけから漢字を示してしまふ方針だったのである。おそらく、これは「曰」などの語を指してゐるのだらう。わざわざ「いはく」と書き下し、学習者に「曰」の字を復原させても、あまりに容易すぎて学習効果がないとの判断にほかなるまい。

もう一つ注意すべきは、ここに謂ふ「助辞」すなはち置き字の扱ひである。東涯は「助辞有れば、数に随つて圈子を加ふ」、つまり「置き字があれば、その字数と同じ数の○を加へておく」との方針だつた。もつとも、事が単純でないことは、二つめの割注の字句から察せられるだらう。これも念のため訳してみれば――

訓読では、助字を読まずにすませる（置き字として扱ふ）ことが多い。したがつて（復文の便宜を図るべく）「矣・也・焉・耳」などの（句末に位置する）助字については○を加へ、そこに助字が存在することを示す。ただし、「之・乎・於・而」などのやうに、句中に位置する助字については、その存在を○で示さなくともよい。

句末の置き字の存在は、必ず○で示しておく。ただし、句中の置き字の存在は、○で示してもよいし、特に示さなくともよい――これが東涯

の置き字に関する具体策だつた。読みを充てないがゆゑに書き下し文には現れない置き字を扱ふべく、なかなか親切な配慮だと言へるだらう。句中の置き字に関する措置が一つに定まらず、いささか中途半端な印象だけでも。

では、実際、東涯はいかなる体裁の書き下し文を復文練習用に与へてゐたのか。残念ながら、実例は未だ目にしてゐない。しかし、右の説明から推せば、おほむね次のやうな体裁であつたらうと推測できる。東涯は「国字」すなはち仮名と記すだけで、平仮名か片仮名かは明記してゐないが、当時の用字法に鑑みて、おそらくは片仮名を用ゐてゐたものと想像する。むろん、今は書き下し文の体裁だけが問題であるから、東涯の示す「原文は最低でも「百字」との基準にはこだはらない。また、当時は読点と句点のいづれか一種のみで句読を切つてゐたであらうが、ここでは両者を使い分ける。なほ、東涯は、原文の字数を書き下し文の「左に注す」としてゐるが、便宜上、今は末尾に添へておく。

・ソウシノ曰ク、ヲハリヲツツシミテトホキヲオヘバ、民ノ徳アツキニキス〇。(十二字) *〔原文〕曾子曰、慎終追遠、民徳帰厚矣。
〔論語〕学而)

・子ノ曰ク、ワレジツイウゴニシテ(〇)学ニ(〇)ココロザス。サンジフニシテ(〇)タツ。(十四字) *〔原文〕子曰、吾十有五而志乎学。三十而立。(論語)為政)

第一文では、句末の置き字「矣」を〇で示した。「曰/民/徳」の三字を漢字のままに残したのは、あまりに平易なので仮名に改める必要なし、と恣意に判断した結果である。

第二文では、句中の置き字「而/乎/而」を(〇)で示した。括弧を付けたのは、〇を加へるか否かは任意の措置との意味である。「子/曰/学」の三字を漢字で残したのは、これもまた恣意による判断にほかならない。

中らずと雖も遠からず、東涯の与へた書き下し文は、たぶん右のやうな体裁であつたことだらう。学習者は、かうした書き下し文に基づいて復文を行ふわけだ。その作業を東涯は「復者就訳文以漢字複写……」(復する者は、訳文に就いて漢字を以て複写し……)と説明するが、当該の字句は第一節で引用したので、ここでは省略に従ふ。原文は最低でも「百字」ところどころに漢字が残つてゐるだけとなれば、当時としても、やはり荷の重い作業であつたかと思ふ。むろん、だからこそ勉強になつたのだと言はれれば、それまでであるが。

ただし、言ふまでもなく、正しく復文できる場合もあれば、間違ひが生じる場合もある。この点、東涯は甚だ親切だ。復文にさいして起ころ間違ひを、「其科有四」(其の科四有り)とし、以下のごとく四つに分けて説明する。

①錯置〔顛倒〕 復者就訳文、随国言複写。不熟字法者、或与華語倒置。謂之錯置。如「不復」作「復不」、「誰欺」作「欺誰」是也。復する者は訳文に就いて、国言に随つて複写す。字法に熟せざる者は、或いは華語と倒置す。之を錯置と謂ふ。「不復」を「復不」に作り、「誰欺」を「欺誰」に作るが如きは是れなり。

右は語序の誤りを言ふ。学習者が最も多く犯す誤りだ。

② 妄填（謬字） 復者不諳成語練字義、或以訓同音似、誤填寫他字。

謂之妄填。如「臨」作「望」、「易」作「安」是也。或原文奇僻難復者、聽復者空其字以朱追補。或音義並同者、雖非原字不入數。如「於」作「于」、「耶」作「邪」是也。

復する者は成語を諳んじて字義を練らず、或いは訓の同じく音の似たるを以て、誤つて他の字を填寫す。之を妄填と謂ふ。

「臨」を「望」と作し、「易」を「安」と作すが如きは是れなり。或いは原文の奇僻にして復し難き者は、復する者の其の字を空しうし朱を以て追つて補ふことを聽す。或いは音義並びに同じき者は、原字に非ずと雖も数に入れず。「於」を「于」と作し、「耶」を「邪」と作すが如きは是れなり。⁽⁸⁾

右は同訓異義の字に関する誤りを言ふ。たしかに、「ノゾム」とあれば、「臨」に作るべきを誤つて「望」としたり、「ヤスシ」と来れば、「易」に復原すべきをいつつかり「安」に作つたりしやすいだらう。

もちろん、原文の字がそのまま記されてゐれば、この種の過誤は生じ得ない。逆に言へば、この記述から、東涯の提供する書き下し文が仮名書きを主としてゐたことは明らかであらう。

もつとも、東涯は思ひやりのある人物で、「原文奇僻難復者」（原文の奇僻にして復し難き者）つまり見慣れぬ字遣ひで容易には復原しづらい字については、その字を空白のままにしておき、あとから原文を参照して朱墨で書き入れることも許容すると言つてゐる。また、同音同義の異字、すなはち「於」と「于」、「耶」と「邪」などについては、たとひ取り違へた場合でも、誤字には算入しないと云ふ。いづれもすこぶる實際的で親切な措置だらう。復文の指導には、かかる寛容さが欠かせまい。

③ 剽添（衍字） 本文無助字処、随国言口訣、漫添入他字者、謂之剽添。如「明明德」作「明於明德」是也。

本文の助字無き処に、国言の口訣に随つて、漫りに他の字を添へ入るる者、之を剽添と謂ふ。「明明德」を「明於明德」と作すが如きは是れなり。⁽⁹⁾

右は不要の置き字を入れてしまふ誤りを指摘する。「口訣」は、ここでは「口癖」くらゐの意味であらう。趣旨は明快、説明を要すまい。

④ 漏逸（脱字） 原文有助語者、失不填入。謂之漏逸。如「止於至善」作「止至善」是也。

原文に助語有る者、失して填入せず。之を漏逸と謂ふ。「止於至善」を「止至善」と作すが如きは是れなり。⁽¹⁰⁾

右は、前項③とは逆に、記すべき置き字を入れない誤りを指して言ふ。これも趣旨は明快だ。

そして、③④に鑑みれば、東涯が書き下し文において、一般には句中の置き字の有無を示してゐなかつたことが推測されるだらう。句中の置き字の有無がわかつてゐれば、要らずもがなの置き字を挿入したり、記すべき置き字を取り落したりするはずはないからである。とすれば、先に見たごとく、東涯は割注のなかで句中の置き字について「不必加圈」（必ずしも圈を加へず）と記してゐたが、この「必」字は婉曲表現で、実際には「不加圈」（圈を加へず）すなはち句中の置き字を○で示すことはなかつたと解釈してもよいのかもしれない。少なくとも、「句

中の置き字の有無は示さないのが常態。ただし、学力不足の者に対しては○を以て示すこともあり得る」くらゐに理解しておくのが無難のやうである。

◆江戸時代2 山本北山『作文志毅』 *安永八年(一七七九) 刊

第一節に引いたとほり、北山は、一カ月に四〜五回、仲の好い友だち数名で集まり、互ひに書き下し文を持ち寄つて、復文練習を行ふやうに勧めてゐる。復文が終れば原文と照合し、疑問点については友人のあひだで議論、どうしてもわからなければ先生に訊ねよ、との指示もあるが、これは常識の範囲内だらう。

では、北山は、いかなる原文をどのやうな体裁の書き下し文に仕立てて復文の素材とすべきだと考へてゐたのか。『作文志毅』に具体的な説明と例示があるので、甚だわかりやすい。

『孟子』『莊子』『左伝』『国語』『史記』『漢書』等の古書にて、文辞美しく句法險奇(むじやく)を撰抜して是を訳し、助字の所を虚て圈を処き、疑字の所を虚て方を処き……

素材の原文を抜粹すべく、六つの書名が挙がつてゐる。一見、『論語』が記されてゐないのが奇妙に映るが、これは北山が復文練習用の素材として一百字前後の原文を適当な長さで考へてゐたからだらう。事実、北山が一例として示すのは、一二二字から成る『孟子』離婁下の一節なのである。

どうやら、北山は、短く基本的な復文問題を嫌つてゐたらしい。「文

辞美しく」はともかく、「句法險奇章」にその難問指向が現れてゐる。難所のないやうな復文練習では学習効果に乏しいと思つてゐたのだらう。

そして、殊に興味深いのは、書き下し文の体裁である。「助字の所を虚て圈を処き、疑字の所を虚て方を処き」とは、書き下し文のなかで、「助字」を○で、「疑字」を□で示し、そこに入れるべき文字を考へさせる工夫をいふ。前者「助字」は、わかりやすくだらう。北山の記す「助辞とはへ也・矣・焉・哉・乎・耶」の類なり⁽¹³⁾といふ字句そのままに、置き字・終尾詞の類を指すと理解すればよい。この「助字」の扱ひは、先に見た伊藤東涯の「訳文」と同様である。それに対して、後者「疑字」は見慣れぬ語だが、北山によれば「疑字とはへ見・視・観・睜」(是・此・之・斯)の類なり⁽¹⁴⁾といふ。要するに、一瞬どの字に復すべきか訝るやうな同訓異字の類を指すわけだ。同じ「みる」でもへ見・視・観・睜のいづれを用ゐるのか、等しく「これ」だとしてもへ是・此・之・斯のどれが最適なのか——かうした弁別能力を要求する点で、北山の課す復文練習は難度が高いのである。

では、実際に北山の示す復文課題すなはち『孟子』離婁下/計一二字のうち、特徴の目立つ二箇所を左に録してみよう。

・□將ニ良人ノ所ヲトス○

・其妾ト其良人ヲテ中庭ニ○相泣ク、而シテ良人未ダヲ知ズ○

第一例では、「われ」「ゆく」「みんな」について、同訓異字のなかから正しい字を選択できるかどうかを試される。候補となる字は、それぞれ「吾・我」「往・行・之・逝」「見・看・視・観・睹・睜」くらゐか。正解は「吾/之/睜」だが、とりわけ「みる」の字を「睜」に確定するの

は難しい。そして、末尾の置き字は「也」である。実際には「良人ノ」の「ノ」が、漢字「之」に復されるのか、送り仮名として補読されるのかも悩ましいはずだが、その点に対する配慮はない。全体を復文すれば「吾将嗚良人之所之也」となる。再読文字「将」に関する知識が必要なことは言ふまでもない。

第二例は、「そしる」「これ」の同訓異字を選択する問題だ。後者はすぐに「之」だらうと見当がつくものの、前者は難しい。正解は「訕」だが、「誹・謗・譏」その他を排斥して「訕」に確定するのは至難の業かと思はれる。「中庭ニ〇」は句中の置き字、「知ズ〇」は句末の置き字だが、正解こそ「於ノ也」といふ見慣れた字に落ち着くとはいへ、これまた他の字を排斥するのは容易ではない。全体を復文すれば「与其妾訕其良人而相泣於中庭、而良人未之知也」となる。末尾「未之知」の語順を復原するには、再読文字「未」についての知識はもろんのこと、漢文の倒置に関する知識が不可欠だ。なんとも難しいかぎりの復文練習である。

しかも、右の二例の復文字数は、合はせて二十九字にすぎず、全文計一百二字を正確に復文するとなれば、さらに各種の基礎知識や応用知識を動員せねばならない。それだけに、復文練習に真摯に取り組めば、一気に大量の知識を獲得・確認できることも事実である。

もつとも、北山が乱暴な復文指導を行つてゐたと考へるのは誤りだ。学習者が苦し紛れに原文を見てしまふと学習効果が半減するので、北山は先手を打ち、「訳文を覆するに臨んで、何如なる險き句の自家の工夫にて覆し難ありとも、ゆめゆめ原文を出して視べからず」と注意を与へてゐる。なかなか周到な気遣ひであらう。

そして、伊藤東涯と同様に、復文に生じやすい誤謬として、北山は

「倒錯」と「謬用」を指摘してゐる。その内容も、「倒錯」は東涯の言ふ「錯置（顛倒）」に等しく、「謬用」は東涯の掲げる「妄填（謬字）」に同じ。北山の指導も、東涯に負けず劣らず親切だ。ただし、東涯が復文に生じがちな誤りとして指摘した「剩添（衍字）」や「漏逸（脱字）」については触れてゐない。右に見たやうに、北山の書き下し文は、句中・句末の置き字の類を○で示してあるので、たとひ置き字を書き誤ることはあつても、不要の置き字を書き添へたり、必要な置き字を書き落としたりする危険はないからだ。この点では、東涯よりも、むしろ北山のはうが行き届いてゐるのである。

『作文志穀』が求める復文の水準は、なかなか高度だ。けれども、約一百字の原文を素材とし、細かい配慮の行き届いた書き下し文を提供してゐる点で、江戸時代の本格的な復文練習を髣髴とさせる一書なのである。

◆江戸時代3 皆川淇園「編」『習文録』初編

*寛政十年（一七九八）刊

この復文練習用の一書は、上下二巻から成る。上巻に課題の原文と「甲乙判」を収録し、下巻には葛西欽「題言」、「読譜」すなはち書き下し文、そして附表「有斐齋射復比較科範」を載せてゐる。このうち「甲乙判」と貴重な「有斐齋射復比較科範」については、本節の末尾で紹介しよう。

すでに第一節で引いた葛西欽「題言」に見えるごとく、原文は「漢人の記事百言上下の文」、書き下し文は「これを読み（＝原文を訓読して）、其読声の片仮名を用て写し」たものであつた。合計五十条にのぼ

る原文と書き下し文が収載されてゐる。とにかく実例が豊富なので、いかなる原文が選ばれ、どのやうな体裁の書き下し文が提供されたのか、まさに手に取るやうにわかる書物だ。

ただし、「漢人の記事百言上下の文」とあるものの、実際に原文全五十条を調べてみると、たしかに九十一字〜百十字の原文が計二十七条で過半数を占めるが、百十一字〜百四十字の原文も十六条を数へ、最長は百九十字が一条、最短は七十五字が一条、全五十条の平均で百十一字である。詳細は左の表を一瞥していただきたい。すでに見た伊藤東涯「訳文法式」の「一二百字至五六百字」（一二百字より五六百字に至る）に比べれば、ほとんどその最低線にとどまる字数とはいへ、やはり甚だ負担の重い復文作業であつたことが想像される。

『習文録』初編 全 50 条	
字 数	条 数
75~80	2
81~90	2
91~100	8
101~110	19
111~120	9
121~130	3
131~140	4
141~150	1
151~160	1
190	1

また、書き下し文は、実際には片仮名のみで記されてゐるわけではなく、漢字も交じつてゐる。どのやうな漢字を残すこととしたのか、その方針は明記されてゐない。

余談ながら、興味を引くのは、原文と書き下し文の掲載順序が一致してゐないことだ。いづれも五音「宮・商・角・徴・羽」に十干「甲・

乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸」を組み合はせて全五十条の番号としてゐるものの、上巻の原文が五音を主、十干を従として「宮甲・宮乙・宮丙……羽辛・羽壬・羽癸」と排されてゐるのに対し、下巻の書き下し文は五音を従、十干を主として「宮甲・商甲・角甲……角癸・徴癸・羽癸」と並べられてゐる。最初の第一条と最後の第五十条を除けば、すべて排列順序に食ひ違ひが生じてゐるわけだ。今日の我々が原文と書き下し文を照らし合はせようとすると、甚だ使ひ勝手が悪い。書き下し文に基づいて復文しても、正解の原文がどこにあるのか、探すのに一苦労するだらう。しかし、按ずるに、これは学習者に対する親切心の現れだつたに違ひない。つまり、原文と書き下し文がまったく同じ順序で排列されてゐると、一つの復文作業を終へて原文と照合してゐるとき、否応なく次の原文すなはち次の復文の正解が目に入つてしまふ。それでは学習効果が半減する、互ひの排列を変へておくほうが却つて親切だ——かうした配慮から、原文と書き下し文の掲載順序に不一致が生じたのであらう。漢文学習が盛んであつた江戸時代ならではの工夫かと愚考する。

ともあれ、論より証拠、最短七十五字より成る「羽辛」の書き下し文と原文を一例として左に録す。書き下し文の仮名遣ひはママ、変体仮名は通常の片仮名に改め、句読を切る読点の一部を句点に変へる。原文にも同じく句読点をほどこしておく。

節度使李愬ステニ蔡ヲタイラゲ、呉元済ヲ械シテ京師ニオクリ、兵ヲ鞠場ニ屯シ、モツテ招討使裴度ヲマツ。度城ニイルニ、愬囊韃ヲソナへ、出テミチノ左ニムカヘ押ス。度マサニコレヲサケントス。愬ガイハク、蔡人頑悖ニシテ、上下ノ分ヲシラザルコト数十年ナリ。ネガハクハ公ヨツテコレニシメシ、朝廷ノタツトキラシラシメヨト。

度スナハチコレヲウク。(原文七十五言)

節度使李愬既平蔡、械吳元濟送京師、屯兵鞠場、以待招討使裴度。度入城、愬具橐韃、出迎拜于路左。度將避之。愬曰、蔡人頑悖不識上下之分數十年矣。願公因而示之、使知朝廷之尊。度乃受之。

書き下し文に付された「原文七十五言」の「言」は、字の意。『習文録』は、原文の字数をすべて「百十一言」のごとく指定してゐる。

原文と照合するに、書き下し文に漢字をそのまま持ち込んでゐるのは、官職名(「節度使」「招討使」)・人名(「李愬」「吳元濟」「裴度」)・地名(「蔡」)などの固有名詞、および復原が困難と予測される単語(「械」「鞠場」「橐韃」「頑悖」)、ならびに復原を求めるまでもない容易な字句(「兵」「屯」「城」「人」「上下…分」「数十年」「公」「朝廷」)かと思はれる。「京師」を漢字のままに残したのは、「ケイシ」と発音する地名かと誤解し、あれこれ地名を想ひ起こして時間を空費するのを防ぐためであらう。あるいは、やはり「京師」も復原を求める必要のない容易な字句に数へられてゐたのだらうか。

それにしても、字数こそ七十五字といふ最短の問題だが、置き字に関する指示が記されてゐないため、復文作業は困難を極めるだらう。「兵ヲ鞠場ニ屯シ」が単なる四字句「屯兵鞠場」なのか、置き字を入れた「屯兵於鞠場」なのか、まったく判断がつかない。それに比べれば、ただしも「出テミチノ左ニムカヘ拜ス」||「出迎拜于路左」の「于」(または「於」)は入れやすい。「公ヨツテコレニシメシ」||「公因而示之」の「而」は書き入れられるだらうが、直前の「蔡人頑悖ニシテ」||「蔡人頑悖」は置き字「而」を添へて「蔡人頑悖而」のやうに作つてしまふ危険を避けられまい。そして、極めつけは、「数十年ナリ」||「数十年

矣」の末尾の置き字「矣」である。大部分の者が誤つて「数十年也」に作るだらう。あれやこれや工夫を重ねて字数を合はせてみても、かうした置き字の処理は、正解たる原文を見なければ、ほとんどお手上げといふのが正直なところではなからうか。

しかし、ともかくも、これが『習文録』における復文練習の実態だ。むろん、置き字について、実際は口頭などで指示がありながら、『習文録』を録した葛西欽が煩を嫌つてそれをすべて省いてしまつたといふ可能性も皆無ではない。けれども、それならば、葛西の長い「題言」のどこかに関連する字句が見えて然るべきだらう。右の一例に限らず、『習文録』の書き下し文は、置き字に関する配慮の跡がまったく見られないのである。

なほ、右の一条について、上巻に見える「甲乙判」の字句を紹介しておきたい。「甲乙判」とは、つい復原を誤つてしまふ可能性の高い字句を取り上げ、ありがちな誤りを二つ挙げて、相対的に罪の軽い誤りを「甲」、罪の重い誤りを「乙」とし、さらに解説を加へたものだ。同訓異字の誤字を掲げて、それぞれの意味合ひの相違を説く内容が大半を占めるが、時には語順の間違ひに言及したり、場合によつては誤りの例を一つだけ挙げ、それを「甲」または「乙」と判じたりもする。要するに、誤答例を掲げ、原文と同一の字句に作る正解を満点とすれば、「甲」は一〜二点の減点、「乙」は三〜四点の減点と言ふに等しく、付するに解説を以てしてゐる点で、あたかも今日の自習用参考書が「解答」欄に掲げる「ここがポイント! 採点基準と解説コーナー」に似る。

ただし、この「甲乙判」は簡潔を旨としてゐるため、右の一条についても、かなりの難題ゆゑに多くの字句に関する誤りを指摘するかと思ひきや、取り上げてゐるのは「不識上下之分」の一箇所のみ、それも

「識」字の間違ひに関する注意だけである。実にあつさりしたものだ。

〔甲〕知〔乙〕認 「識」ハ覚ヘテ居ルコトナリ。「知」ハ其物ノ別チテ心ニ通ズルコトナリ。「認」ハ見トメ見シルコトナリ。

「識」を、誤つて「知」に作るはうが「認」に作るよりも優れてゐるとの判定である。たしかに、「認」では不適だらう。現在、幸か不幸か、「認」を「シル」と訓ずることはないので、我々がこのやうな間違ひを犯す可能性はあり得まい。それにしても、これだけの説明で、「上下ノ分ヲシラザル」を「不知上下之分」に作る危険性を防げるのかどうか。今一つ判然としない印象ではある。

最後に、下巻の末尾に見える附表「有斐齋射復比較科範」の内容を紹介しておかう。「有斐齋」は皆川淇園の号、「射復」は既述のごとく「復文」を意味する。「科範」は、見慣れぬ語だが、科とがすなはち過失の基準を言ふのだらう。つまり、この附表は、複数にわたる課題の原文について復文作業を終へた時点で、どれだけの数の誤りを犯したかによつて優劣を比較し、その等級を分けたものである。端的に言へば、淇園の漢学塾における成績基準表にはかららない。この附表は二つに分かれてゐる。

第一表は、全体の成績基準表だ。たとへば、原文に換算して二百八十字の復文練習を終へた時点で、誤つた字数が十四個内ですめば最上位の「知言」、二十八個内であれば「成人」となり、同様に二十九個から三十四個で「大文」、三十五個から四十個で「令聞」、四十一個から四十七個で「贍辞」、四十八個から五十四個で「俊秀」と格下げされてゆき、五十五個から五十六個の誤りを犯せば最下位の「材敏」となる。五十七個

以上の誤りを犯した者については等級が記されてゐない。二〇%を超える誤りを犯すやうな者は、実力不足ゆゑに論外の扱ひなのであらう。最下位の「材敏」でも、「材敏」といふ等級が与へられるだけ、なかなか名譽といふことだ。今日風に言へば、八〇点以上の「優」なのであるから。もちろん、原文の字数が増せば、これもまた誤りの数に依じて「知言」「成人」「大文」「令聞」「贍辞」「俊秀」「材敏」の七等級に分かたれる。詳しくは見やすく作りなほした左の別表1を御覧いただきたい。

別表1 「有斐齋射復比較科範」第1表

原文字数	誤 謬 字 数						
	知言	成人	大文	令聞	贍辞	俊秀	材敏
280	14	28	29-34	35-40	41-47	48-54	55-56
290	14	29	30-35	36-42	43-49	50-56	57-58
300	15	30	31-37	38-44	45-51	52-58	59-60
310	15	31	32-38	39-45	46-52	53-60	61-62
320	16	32	33-39	40-46	47-54	55-62	63-64
330	16	33	34-40	41-48	49-56	57-64	65-66
340	17	34	35-42	43-50	51-58	59-66	67-68
350	17	35	36-43	44-51	52-59	60-68	69-70

第二表は、最上位の「知言」と次上位の「成人」とのあひだに、さらに細かく「発憲」「力達」「知至」「自強」の四等級を設けた部分的な成績基準表だ。誤りの数にほんのわずかな差があるだけで、「知言」「成人」をも含め、六等級に分かれるやうになつてゐる。成績優秀者どうしの復文能力競争用、いや決戦用に定めた性質のものではなからうか。原文一百字のうち、誤りが五個ならば「知言」、六個であれば「発憲」、七個で「力達」、八個で「知至」、九個で「自強」、そして十個で「成人」といふ細かさだ。第一表と同じく、原文の字数が増加しても、誤りの数に応じて六等級に分かれる仕組みになつてゐる。これについても、詳細は現代風に作り変へた左の別表2を御一瞥いただきたい。

別表2 「有斐齋射復比較科範」第2表

原文字数	誤 謬 字 数					
	知言	発憲	力達	知至	自強	成人
100	5	6	7	8	9	10
120	6	7	8	9	10	11-12
140	7	8	9	10	11-12	13-14
160	8	9	10	11-12	13-14	15-16
180	9	10	11-12	13-14	15-16	17-18
200	10	11-12	13-14	15-16	17-18	19-20
300	15	16-18	19-21	22-24	25-27	28-30
400	20	21-24	25-28	29-32	33-36	37-40

淇園『習文録』は、書き下し文における置き字の措置こそ少し不親切だが、復文練習の成績表を具体的に伝へてゐる点で、当時の実態を窺ふには珍重すべき資料なのである。

なほ、『習文録』は復文問題集として好評を博し、寛政十年（一七九八）に初編が刊行されたのち、二編・三編と増補が続けられ、淇園の没後、文化八年（一八一）には初編から四編までが揃つて刊行された。弘化三年（一八四六）にも、改めて初編が出版されてゐる。江戸時代の復文練習を代表する書物だと言つてよいだらう。

◆江戸時代4 編者未詳『課蒙復文原文』*成書年等不詳

本書は、大阪大学附属図書館が蔵する並河寒泉文庫（淡輪家旧蔵、昭和六十年寄贈）に収められてゐる。題名の「課蒙」（蒙に課す）から見て、初学者に復文練習用の課題として与へる原文を収録したものに違ひない。もつとも、書物と称するには程遠く、縦二四センチ×横一七センチの仮綴ぢ全三十六丁に仕立てられてはゐるが、末尾付近に九丁、最後に四丁の白紙があり、ほとんど復文練習用の原文を寄せ集めた冊子である。復文の課題とするために字数を数へる関係上、半丁十行、一行平均二十字の体裁で書写された墨字は、なかなかきれいで読みやすいが、

実は、これが江戸時代の人の手に成つたといふ確証はない。仮綴ぢの状態その他から見ても、たぶん江戸時代のものだらうと推定してゐるにすぎぬ。右の見出しに記したやうに、編者未詳・成書年等不詳といふのが正直なところだ。皆川淇園『習文録』が「原文」と「読譜」すなはち書き下し文から成つていたやうに、せめて『課蒙復文読譜』が遺つてゐれば、なんらかの書誌情報が得られるかもしれないが、今のところは未見

である。仮にここに置いて論じることが御容赦いただきたい。

内容は、約九十条におよぶ原文を録し、簡略に出典を記したうへで、復文用の総字数が書き添へてある。「約九十条」と曖昧な言ひ方をするのは、漢数字で「一」から「八十七」まで通し番号が付けてはあるもの、「六」と「七」が逆転し、そのあひだに「五十六ノ下」が入つてゐたり、「十七」「廿二」や「七十三」も上下に分かれ、「廿二ノ下」だけは巻末の近くに記されてゐたり、「六十六」が存在せず、「六十八」が見せ消ちで抹消されてゐたり、「七十三ノ下」と「七十四」のあひだに書きかけのまま放置された無番号の原文があつたり、「八十五」と「八十六」のあひだに無番号のまま「八十三」の原文が重出してゐたり、巻末近くに「廿二ノ下」と並んで、「一ノ中」が書き付けてあつたりするからである。「一ノ上」は「二十八」と「二十九」に挟まれて存在するが、「一ノ下」はどこにも見当たらない。たぶん、冒頭の「一」が実質上は「一ノ下」なのであらう。ただし、かうした甚だ錯雑したありさまは、実際に本書が復文練習に活用された証拠だと考へて差し支へあるまい。字数の多寡や難易度その他を勘案して出題の順序を変更したり、一回一題のつもりが、やはり二、三題でもよからうと思ひ直して、一つの番号を上(中)下に分け、ふさはしい課題が直後にならない場合は、遠くにある原文を採用したり、新たに原文を選定して巻末近くに書き加へたりした結果、このやうな甚だしい混乱が起きたのだらう。本書は刊本ではない。あくまで復文の課題を提供するために教授者自身が用ゐた覚書を、たまたま冊子に仕立てた性質のものかと思はれる。

出典の注記はほとんどの原文に見えるが、直後の原文と同一の出典の場合には、省略されてゐることもある。

復文用の総字数は、すべての原文に書き添へられてゐる。通し番号

「四十五」のやうに、誤つて記した「五十二字」が「七十二字」に訂正されてゐるやうな箇所もあるが、編者自身による訂正なのか、後を継いだ教授者その他による訂正なのかはわからない。約九十条のうち、最長は「七十六」の二百四十六字、最短は「一ノ上」の二十字である。一般に原文の字数は短く、一百字を超える原文は計七条しかない。適宜に重出や無番号の原文を削り、合計九十二条として計算すると、平均字数は六十四字。もし一百字を超える計七条を例外として除き、合計八十五条として算出すれば、平均で五十九字である。皆川淇園『習文録』の平均百十一字に比べると、ほぼ半減の数字だ。

いづれにせよ、本書が収録するのは原文のみ、どこにも書き下し文は見当たらない。となれば、復文の実態が窺へるのは課題とされた原文だけかといふと、実は然らず。原文の末尾に、出典・総字数と並んで、置き字について覚書が記されてゐる場合がある。これは復文用の配慮にはかならない。通し番号「五十二」を左に録して一例としよう。今、特に必要がないので、句読は切らず、書き下し文も添へない。成語「望梅止渴」(梅を望んで渴を止む)または「梅林止渴」(梅林渴を止む)で知られる有名な逸話だ。冒頭の「魏武帝」は曹操を指す。

魏武帝与軍士失道大渴而無水遂令曰前有梅林結子甘酸可以止渴士卒聞之皆口中水出遂得及泉源也 四十三字 而一也一

末尾に見える「而一也一」が、置き字に関する覚書である。言ふまでもなく、「この原文には〈而〉一字、〈也〉一字が含まれてゐる」との意味だ。学習者たちは、これに応じて「大イニ渴イテ水無シ」を「大渴而無水」に、「遂ニ泉源ニ及ブコトヲ得タリ」を「遂得及泉源也」に、そ

れぞれ正しく復文できるわけである。今日ならば、末尾の「也」は置き字とせず、「……得タルナリ」と訓読するのが一般だらうが、本書の教授者が関はる漢学塾では「也」を置き字扱ひしてゐるに相違ない。

ただし、書き下し文の体裁が不明である以上、この「而一也」が、置き字についての覚書にとどまらず、置き字に関する指示とまで言へるか否かはわからない。つまり、「而一也」は単なる覚書にすぎず、実際に書き下し文のなかで、たとへば伊藤東涯「訳文法式」のごとく、○を以て置き字の位置を示してゐたのか、それとも、書き下し文を提供すると同時に、そのまま単に「へ」が一字、「也」が一字といふやうに置き字に関する注意を口頭で与へてゐるにとどまるのか、どうにも釈然としないのである。

もつとも、さうした釈然としない点を補つて余りあるやうな注記もあるから油断がならない。右のごとく、注記の大半が置き字「而・也・矣・於」などの字数を覚書風に記してゐるだけのだが、時をり「之」に関する注記が見られるのである。これは注目すべき措置だ。ただちに通し番号「二」を掲げてみよう。この逸話もなかなか有名だ。

齊桓公問管仲王者何所貴対曰貴天桓公仰觀天管仲曰所謂之天者非謂蒼蒼莽莽之天也君人者以百姓為天 四十五字 之二也一

末尾の「之二也一」は、やはり「この原文にはへ」二字、へ也」一字が含まれてゐる」との意。しかし、だからといつて、先の例に見えた「而一也」と似たやうなものだと踏み倒すわけにはゆかない。「之」に関する注意は、「也」などの置き字とは性質が違ふのだ。置き字は発音しない。けれども、「之」は一般に「ノ」と読むのである。この原文で

言へば、「所謂之天者」||「謂フ所ノ天ナル者ハ」、「蒼蒼莽莽之天」||「蒼蒼莽莽ノ天」の二箇所がそれに該当する。だが、「之」はそのまま「ノ」と訓読するものの、書き下し文に「ノ」とあるからといつて、それがただちに「之」に復原されるとは限らない。冒頭の三字「齊桓公」は、ふつう「齊ノ桓公」と訓読するが、一見して明らかやうに、「之」字は存在しない。つまり、「ノ」には、漢字「之」の読みである場合と、送り仮名として補読される場合とがあるわけだ。したがつて、書き下し文に複数個の「ノ」が現れるときには、どの「ノ」が漢字「之」の読みで、いづれの「ノ」が補読の送り仮名なのか、その仕分けをしなければ、正しい復文ができないのである。この「ノ」の復原作業を助けるべく「之」の字数を示しておくことは、親切きはまる措置だ。おそらく、伊藤東涯や皆川淇園も、この問題に気がついてゐたはずである。しかし、それを明記したことは、この『課蒙復文原文』の功績に帰してよいだらう。「之」を含む原文すべてに「之」の字数が示されてゐるわけではなく、明らかに別人の手による朱墨で、置き字の字数の下に「之一」だの「之六」だのと追記してある場合も少なくないけれども。

『課蒙復文原文』は、往時の復文練習用の原文の実態を知るには便利な一書だ。置き字や「之」に関する配慮も見られる。特に「之」の字数を示した点は高く評価できよう。けれども、肝腎の書き下し文が皆無のため、その置き字や「之」に関する配慮が復文練習の現場にどのやうに反映されてゐたのかは、不明としか言ひやうがない。願はくは、いつの日にか『課蒙復文読譜』が発見されんことを。

◆明治期 漢文教科書の復文問題 I *明治三十五年(一九〇二)

復文は、明治維新以後も漢文の学習法として引き継がれた。明治九年（一八七六）、やはり皆川淇園『習文録』初編〜四編が刊行され、同年には五篇まで取り揃へた『習文録』も出版されてゐる。また、明治十三年（一八八〇）には、渡邊元成「編」『明治新撰習文録』全四巻が刊行された。第四巻の附録「助字解」はそれなりに新鮮な工夫だが、書名が如実に示すとほり、全体としては『習文録』をほぼそのまま踏襲した体裁である。皆川淇園『習文録』は、明治期になつても大きな影響力を発揮してゐた。おそらく、復文の教科書と称しても過言ではないやうな地位を占めてゐたものと思はれる。

ただし、学校教育の普及とともに、漢文が学校の教室で教へられるやうになると、文字どほりの教科書に復文の練習問題が登場する。江戸時代の例と五十歩百歩の復文問題をあれこれ引用することは控へ、時代の雰囲気を反映する一例のみを掲げることとしたい。明治三十五年（一九〇二）に出版された国語漢文研究会「編」『中等漢文教科書』に見える復文の課題を左に録す。

明治二十七年、征清の軍興^{せいせい}り、清国大に敗^{おほい}る。明年清国使を遣して、和を請ひ戦を弭^やめ、台湾を以て我に帰せしむ。是より全島我が版図と為りぬ。原文三十七字⁽¹⁸⁾

日清戦争を当時の日本の立場から簡潔に説明した字句だ。なぜ復文問題を国威発揚の場とするのか、今日の感覚では理解しかねるが、日英同盟が締結され、やがてロシアと一戦を構へることにならうかといふ明治三十五年には、かうした字句をすんなり受け入れられる雰囲気は漂つてゐたのであらう。末尾の「為りぬ」が、いささか古めかしい印象だ。現行の

訓読では、完了の助動詞「ぬ」を用ゐる場面は滅多にない⁽¹⁹⁾。単に「為る」で終へるか、どうしても完了を表はしたければ、完了の助動詞「り」を使つて「為れり」とするのが現行の流儀である。原文は次のとおり。

明治二十七年、征清軍興、清国大敗。明年清国遣使、請和弭戦、以台湾帰我。自是全島為我版図。

置き字が一つもないので、復文の負担は軽い。引つ掛かりを覚えるとすれば、「征清の軍」の「の」が漢字「之」なのか送り仮名なのか、「帰せしむ」の使役「しむ」が漢字「使」（または「令」など）なのか送り仮名なのかといふ程度だが、「是より」の「より」さへ「自」に復せれば、指定された字数から「之」も「使」も不要だとわかる仕掛けである。復文問題が時代の雰囲気を実に反映することもあつたのだ。

◆昭和期 漢文教科書の復文問題2 *昭和二年（一九二七）

もはや十分であらう。やはり昭和期の漢文教科書に掲載された復文問題を一つ紹介して、歴史に沿つた実態の概観を終へることとする。昭和二年（一九二七）に出版された深井鑑一郎「編」『選定中等漢文』に見える復文練習問題を左に引く。

天の（之）人の国を亡^{ほろぼ}す、其の禍敗必ずや智の（之）及ばざる所に（於）出づ。聖人の天下を為^なむる、智を待^たんで以て乱を防がず。其の乱を致す無きの（之）道を持むのみ（耳）。三十五字⁽²⁰⁾

字数は先に引いた明治期の例と似たやうなものだが、書き下し文は甚だ親切な体裁である。「(於)」「(耳)」のやうに、置き字や終尾詞について、その位置だけでなく、どの字を用ゐるかまで示されてゐるので、復文作業に当たつては、ほとんど機械的に「於」や「耳」を指示された位置に記してゆけばよい。殊に親切なのは「之」に関する指示で、どの「の」を漢字に復せばよいのか、一目瞭然である。むろん、指示された以外の「の」は、補読された送り仮名の「の」だ。復文の結果は次のやうにならう。

天之亡人国、其禍敗必出於智之所不及。聖人為天下、不待智以防乱。待其無致乱之道耳。

助辞の類に関する苦勞が皆無に近いので、もつぱら語順に注意を払ふこととなる。おそらく、出題の意図もそこにあつたのだらう。実際、「智の及ばざる所に出づ」や「其の乱を致す無きの道を持つ」などを正確に復文するのは、初心者にとつて容易ではあるまい。また、「智を待んで以て乱を防がず」についても、「待智以防乱」なのか「不待智以防乱」なのか、意味を熟考しなければ正しい語順はわからない。どちらでも、書き下せば「智を待んで以て乱を防がず」になつてしまふからだ。要するに、否定辞「不」が「防乱」の二字だけに係るのか、それとも「待智以防乱」の五字全体に係るのかが判断できてこそ、始めて復文が可能となるわけである。

字数こそ少ないものの、かうした手応へ十分の復文練習問題が、昭和期になつても漢文の教科書に載せられてゐた。ざつと見積もつて、伊藤

東涯「訳文法式」が成つた江戸は元禄三年(一六九〇)から昭和の終戦(一九四五)に至るまで約二百五十年。復文練習は、漢文の学習法として、優に二百年を超える歴史を有してゐたのである。

三 復文の効果と位置付け

では、復文練習の意義は、どこにあつたのだらうか。いかなる効果を期待して、先人たちは復文作業に励んでゐたのであらうか。ともあれ江戸時代の見解に耳を傾けてみよう。前節に同じく、伊藤東涯「訳文法式」・山本北山『作文志毅』・皆川淇園『習文録』初編に記された字句を紹介する。

(1) 伊藤東涯「訳文法式」

すでに紹介したごとく、東涯は「其法有三」として「原文・訳文・復文」を説き、次いで「其科有四」として復文にありがちな誤り「錯置・妄填・剩添・漏逸」を指摘してゐたが、最後に「其益有三」(其の益三有り)として復文の効用を三つ挙げてゐる。きはめて整然とした叙述だ。便宜上、それぞれに番号を付して句読を切り、書き下し文を添へる。

①熟古文 先賢傑作、用意復之、則不待習誦、而自諳其文勢語脈矣。其益一。

古文を熟す 先賢の傑作、意を用ゐて之を復するときは、習誦を待たずして、自づから其の文勢語脈を諳んず。其の益の一なり。

名作の復文練習を行へば、暗誦に励まずとも、その語勢文脈が自然に身に着くとの趣旨だ。

②識字法 吾人、平日国語読過、不知字法。將復文対原文、則本有成式、不待考而知矣。其益二。

字法を識る 吾人、平日国語を読み過ぎ、字法を知らず。復文を將て原文に対するときは、本成式有り、考ふることを待たずして知る。其の益の二なり。

ふだん日本人は漢字を日本語として理解してゐるため、ともすれば漢文すなはち古典中国語としての字遣ひがわからなくなつてしまふ。しかし、復文練習を行へば、そもそも原文に正解が示されてゐるのであるから、思ひ悩むことなく正しい字遣ひを知ることができる——との主張である。

③諳用語 平生、漫爾讀書、不熟用語。及弄筆、茫然失措。復之精熟、則材料積于胸中、用之不竭。其益三。

用語を諳んず 平生、漫爾として書を読み、用語を熟せず。筆を弄するに及んで、茫然として失措す。之を復し精熟するときは、材料胸中に積んで、之を用ゐて竭きず。其の益の三なり。

復文練習に精を出せば、語彙を確実に習得することができ、作文に臨んだときに適切な言葉がすぐ念頭に浮かぶやうになる、との趣旨である。ここに東涯の考へる復文練習の目標が示されてゐると見てよいだらう。

要するに、復文練習を通じて、漢文の①語勢文脈を身に着け、②用字法

を理解し、③語彙を習得すれば、自由に漢文が書けるやうになる、といふわけだ。最終的には、漢作文の能力を得ることこそが復文練習の効用なのである。復文作業は、漢文を「書く」ための基礎練習として位置付けられてゐたのだつた。

(2) 山本北山『作文志毅』

北山が復文を「覆文」と記してゐることは第一節で紹介したが、その引用文を左に再録する。

文章を作らんと思はば、善交の友二三、若は四五人と結社し、月に四五回の会日を期め、各々訳文を携来て覆文すべし。訳文とは、古人の文を国字にて訳したるなり。覆文とは、訳文を原文に覆すを云ふ。

冒頭の「文章を作らんと思はば」から明らかなやうに、やはり北山も、復文作業を、漢文を「書く」ための基礎練習として位置付けてゐたのである。

ただし、北山は、東涯と異なり、復文の効用を整然と列挙してはゐない。第二節で見たやうに、北山は復文に生じやすい誤謬として「倒錯」と「謬用」を指摘してゐるが、さうした誤謬を防げるやうになれば、正しく漢作文ができるやうになる、といふのが北山の信念であつたかと思受けられる。北山が自ら記した字句を読んでみよう。復文の練習期間を示してゐる点が甚だ興味深い。

月を累て之(『覆文』)を為べし。大概四五ヶ月も覆文に努力すれば、

倒錯・謬用も頗知るものなり。其時、叙事の文にても議論の文にても倒錯・謬用なきやうに作り、朋友に見せて其異見を問、其上に先生に見て批削を乞へし。

復文の練習期間を、おほよそ「四五ヶ月」としてゐる。そのくらの復文練習を経れば、一応は他人に見せて修正を求めることができる水準にまで漢作文ができるやうになるだらう、といふ。今日と違ひ、当時は学問すなはち漢文の時代である。たしかに、復文練習をも用ゐて漢文の学習に専念すれば、半年間を要さずとも、それくらゐの水準に達するところが可能だったのであらう。

北山にとつても、復文はあくまで「書く」ための練習の一環にほかならなかつた。

(3) 皆川淇園『習文録』初編

これまで本書の下巻に冠せられた葛西欽「題言」の字句を紹介してきたが、やはり当該「題言」に復文の効用が説かれてゐる。葛西が復文練習のもたらす「鴻益」すなはち大いなる利益を五箇条にわたつて列挙するさまは、復文の歴史のなかでも特筆に値する一事であらう。ただし、その字句はいささか冗漫の嫌ひを免れず、趣旨にも東涯・北山と重複する部分があるため、すべてを引用するには及ぶまい。ここでは簡略な紹介を旨とする。

第一条は用字・語彙に関する効果、第二条は語法・文法についての効用、第三条は語勢に関する効果である。この三つは、東涯の挙げた三つの効用にはば重なり、北山の記す復文の効果とも重複する。第一条の冒頭に「初学の作文を習ふには、此射復より善きはなし」とあることか

ら、葛西も復文を「書く」ための練習と捉へてゐたことは間違ひないだらう。ここまでは特に新鮮味があるとは思へない。

葛西の考へに面白味が出てくるのは、第四条からである。実のところ、この第四条はすでに第一節で引いてあるのだが、便宜上、左に再掲してみよう。

窮郷僻邑の士、文章に志しあれども、良師に乏しきものは、此冊（『皆川淇園『習文録』』）誠に諄誨の良師に比すべし。又閑居遁処の人或は読書に倦たる時は、此冊真に嘉告の好友に充つべし。若又朋友の集会する時には、此冊に射覆して酒令とも作すべし。

田舎住まひだらうが、隱居住まひだらうが、『習文録』は復文練習帳として役に立つはずだ、と言つてゐる。復文の学習効果と直接には関係のない話だが、自習書としての価値を前面に押し出した点は画期的な工夫であつたに違ひない。だからこそ、前述のごとく、『習文録』は続編も刊行されて、明治期に至るまで版を重ねたのである。もつとも、「若又」以下に述べる酒席の余興としての効用は、さすがに勇み足の感を免れないと思ふが。

最後に、第五条である。葛西は「読む」ための自習書としても『習文録』を薦めてゐる。

初学、読書に、無点の書の読難きに苦しむもの多し。此冊（『皆川淇園『習文録』』）の読譜を誦熟して後に、原文を按閲せば、其文自ら読下らざることを得ず。原文を読み下し熟せば、其力又他の書にも及ぼすべし。無点の書を読習ふの階梯、又此冊を玩ぶより善

きはなし。⁽²⁵⁾

「無点の書」とは、訓点(返り点+送り仮名)が付いてゐない書物、すなはち白文の漢籍を指す。

『習文録』の「読譜」すなはち書き下し文を十分に暗誦してから、復文の正解たる原文を見れば、自分で白文を読み下す練習になる。さうした訓練を重ねてゆけば、白文の書物を読解する実力も身に着くはずだ——葛西は、白文読解力の養成にも『習文録』が役に立つと宣揚してゐるわけである。もつとも、ここに復文、すなはち葛西の謂ふ「射復」の語は見えない。「復文練習用に提供された書き下し文と原文を用ゐれば、白文読解力の養成も可能だ」との話にすぎず、復文作業それ自体の効用を述べた字句ではないのである。

結局、江戸時代、復文練習には、専ら「書く」ための効用が認められてゐたことになる。しかも、右の北山の字句に「初学」の語が散見し、前節で紹介した『課蒙復文原文』の書名に「課蒙」とあることから、復文は初学者用の練習法と考へられてゐたものと見て間違ひないだらう。初学者が、書き下し文を原文に復す訓練を通じて、語法・文法の基礎を学び、用字・語彙に関する知識を深め、漢文の語気文勢を習得する——これこそが復文の意義だつたのである。

これを今日の目で捉へなほせば、どうなるか。本稿の冒頭で述べたとほり、復文練習は、英語にいふ整序問題にほぼ等しい。どの置き字をどこに用ゐるかが明示されてゐなければ、その難度は単語群から冠詞の類を除いた英語の整序問題に匹敵するだらう。適切な置き字は「而」か「於」か、それとも置き字を記さないのが正しいのか、と思考をめぐらす作業は、名詞について冠詞が〈a〉か〈the〉か、はたまた無冠詞か、

と思ひ悩む作業と五十歩百歩のはずだ。ただし、いづれにせよ、これが初級用の練習作業であることは論を俟たない。英語で、中級者用に和文英訳、上級者用に自由英作文が用意されてゐると同じく、漢文でも、中級者用には和文漢訳、上級者用には自由漢作文が用意されてゐる。和文漢訳の練習がすべての漢学塾で行はれてゐたかどうかは、保証の限りでない。しかし、⁽²⁶⁾少なくとも一部の漢文学習者のあひだで試されてゐたことは事実のやうだ。もちろん、最終的には自由に漢文が綴れるやうになること、すなはち自由漢作文に堪へ得る実力を身に着けることが目標とされてゐたのである。ざつと整理すれば、今日の英語学習との対比において、復文練習は次のやうに位置付けられるだらう。整序問題が英語学習において意義なしとしないのであれば、復文練習も漢文学習において一定の地位を占めるはずなのである。

	漢 文	英 語
初級	復文問題	整序問題
中級	和文漢訳	和文英訳
上級	自由漢作文	自由英作文

四 復文の廃止

けれども、周知のやうに、今日、漢文学習において復文練習が課されるといふ話は、ほとんど耳にしたことがない。そもそも、漢文教育そのものがほぼ死に体に近い現状では、復文練習などにかまけてゐる暇はないといふのが正直なところだらう。いや、もしかすると、事態はさらに深刻で、復文といふ作業それ自体が忘れ去られようとしてゐるのかもしれない。日本語の語順で記された書き下し文を、古典中国語の語順に組み換へて原文を復原しようといふのであるから、多分に対照言語学の要素を含む作業のはずだが、各種の国語辞典こそ「復文」を立項してゐるものの、佐藤喜代治〔編〕『国語学大辞典』（東京堂出版、昭和五十二年）や国語学会〔編〕『国語学大辞典』（東京堂出版、昭和五十五年）は、復文を項目に立てず、索引にすら復文の語が見えない。国語学で復文をまつたく無視するといふのは、いささか不見識ではなからうか。

漢文関係の書物でも、たとへば田部井文雄ほか〔編著〕『社会人のための漢詩漢文小百科』（大修館書店、平成二年）は、やはり復文を立項しない。社会人に復文練習の時間などありはしないと云へばそれまでだが、江戸時代から昭和期に至るまで、約二百五十年にわたつて続いてゐた漢文の学習法を無視することが、果たして妥当な態度なのだらうか。今日ほとんど馴染みのない故事「渴しても盗泉の水を飲まず」その他を立項する余裕があるのなら、復文をも項目として立てるのが一つの見識ではないかと愚考するのだが。

ただし、復文がほとんど息の根を止められた契機は、明確に指摘することができない。関係者の不見識といふやうな漠然とした話ではない。例

によつて例のごとく、文部省が、学習指導要領のなかで、復文練習は行はないものと決めたのだ。昭和二十年（一九四五）の敗戦後、漢文教育が急速に衰退してゆく過程で、復文練習が漢文学習から排斥されたのである。どうやら、それは昭和三十五年（一九六〇）のことであつたやうだ。その年に文部省が告示した『高等学校学習指導要領』の国語編「古典乙Ⅱ」漢文に、指導に当たつて考慮すべき点として「なお、白文の読解や復文の練習は原則として行なわないものとする」と明記されてゐる。これ以後、復文練習は、漢文学習の場から確実に姿を消していつた。今日、復文練習を載せてゐる漢文関係の参考書も問題集も、つひぞ目にしたことがない。これまた例によつて例のごとく、文部省が学習指導要領に謳へば、全員で右に倣へ、現場の教員はもちろんのこと、学者までもがなんら抵抗することなく徹底的な虚無感を發揮、「まあ、たしかに復文の練習をやつてゐるやうな御時世ではないな」と、復文を見殺しにした景色である。

復文練習の重要性を説く書物が皆無といふわけではない。たとへば、鈴木直治『中国語と漢文』は、復文練習が「白文による学習とならんで重んぜられていた」と述べ、本稿でも取り上げた伊藤東涯・山本北山などが書き下し文に工夫を加へてゐた事実を紹介して、江戸時代から戦前に至るまで復文練習が重視されてゐたことに注意を促す。そして、漢文を訓読で教へるかぎり、「先人がその訓読とともに用いてゐた教授法をも取り入れるべきではなからうか」と主張し、文部省が学習指導要領に示した方針を批判、「白文の読解や復文の練習を、原則として行わないといふことは、漢学の学習を大きくゆがんだものにすることになるといわなければなるまい」と結論づけてゐる。

また、伊藤丈『仏教漢文入門』も、白文と復文による学習を薦めてを

り、「初学者は訓読文つきの漢文を読むことも上達への階梯だが、ある程度力がついたら、訓点を一切施していない漢文、つまり白文に挑戦することを勧める。さらにまた、訓読文から原漢文に造ってみたい(復文)、さらにまた進んで、日記等を漢文で記してみることも、漢文練達への一法であろう」と説く。伊藤氏の謂ふ「訓読文」は、書き下し文のこと。復文の語が括弧付きで記されてゐるのは少し淋しいが、伊藤氏が復文を漢文の有力な学習法として考へてゐることはたしかだらう。

もつとも、鈴木直治氏や伊藤文氏の発言を待たずとも、復文が漢文学習にとつて有益な練習であることは、すでに前節で観察した江戸時代の先人たちの説明でも十分だらう。復文練習が英語の整序問題に等しいとすれば、その効用は自明のことであり、整序問題が英語の構文を理解し、語法・文法の知識を確実にするのと同様、復文練習によつて漢文の構文を理解し、漢文の語法・文法の知識が確実に習得できるからである。文部省による廃止は、おそらく復文排斥の外的因子にすぎまい。要は、復文それ自体が抱へ込んでゐた内的原因を探り、それが排斥されるに至つた理由を除去すべく、復文練習そのものを立て直さなければならぬのである。それを怠つてゐるかぎり、復文練習は現状のまま忘れ去られてゆき、永久にお払ひ箱となるだらう。

繰り返し紹介したとおり、復文作業は漢文を「書く」ための基礎練習だった。しかし、漢文を「書く」必要のあつた江戸時代であればいざ知らず、また漢文を「書く」ことが江戸時代の余光を背負つてなほも輝かしい教養であつた戦前であるならば話は別だが、平成の今日、もはや漢文を取り巻く環境は同日の談ではない。きはめて少数の専門家を除けば、漢文を「書く」必要はまつたくなく、「読む」必要でさへ甚だ怪しいのである。そのやうななかで、ただ声高に復文の復活を叫んでも、和文漢

訳はおろか、自由漢作文の必要などまつたくない現代においては、何の説得力もないだらう。単なる哀惜の念では、せいぜい同情を引くのが関の山、たうてい復文の復活には賛同が得られまい。

そこで想ひ到るのは、復文の位置付けの変更であり、その効用を「書く」以外の面に求めることである。これに失敗したからこそ、あるいは、これを怠つてきたからこそ、復文練習は衰滅の一途をたどつたのではなからうか。復文練習が本質的に有用であることに間違ひがないとすれば、復文に対する認識および復文の教授法を一新することによつて、その再生が図れるのではないか。次節以下において、その私見を述べることにする。

五 復文の再認識

漢文が古典中国語の書写言語である以上、固より「聴く」「話す」とは関係なし、そして「書く」をも差し当たりの目標として設定できないとなれば、当然ながら、復文練習は「読む」ことに資するものでなければならぬ。そして、その主眼は、これもまた当然のことながら、語法・文法の確認であり、構文の把握力の向上に存するだらう。発音や語彙の学習について、復文練習が資するところなしといふわけではない。けれども、それは副産物としての効用にとどめ、復文練習の主眼は、あくまで語法・文法と構文の習得に置かねばなるまい。さうでなければ、語句の並べ換えなど行つても、ほとんど無意味だからである。英語の整序問題が、単語群を正しい語順に並べ換へることによつて、英語の語法・文法そして構文に対する理解力の向上を図るのと同じく、復文練習も、書き下し文に示された語句を並べ換へる作業を通じて、漢文すなはち古典中

国語の語法・文法そして構文に対する理解力の向上を目指すわけだ。

ただし、漢文における復文練習と英語における整序問題をまつたく無条件に同一視することはできない。なぜなら、並べ換へにさいして与へられる条件、すなはち書き下し文と単語群とが、いささか性質を異にしてゐるからである。

英語の単語群であれば、とにかくそれを並べ換へるだけだ。与へられた単語群に対し、さらに自ら単語を付け足す必要はない。ところが、書き下し文ではさうはゆかぬ。といふのも、今日、書き下し文は、一般に次のやうな原則に従つて作成されるからだ。

- 一 原文にない漢字は書かない。
- 二 発音しない漢字すなはち置き字は省略する。
- 三 日本語の助詞・助動詞を充てて訓ずる語は仮名書きに改める。
- 四 再読文字は、初読（右傍の読み）に漢字を充て、再読（左傍の読み）を仮名書きとする。

復文作業は、原文から右のやうな手続きで作成された書き下し文を、再び原文に復原するわけである。となれば、書き下し文に見える漢字数と原文の漢字数とのあひだに食ひ違ひが生ずる可能性を考慮しておかねばならない。つまり、原則一により、書き下し文の漢字数が原文の漢字数を上回ることはないものの、原則二および三により、置き字の漢字数が消えたり漢字が仮名に化けたりするのであるから、書き下し文の漢字数が原文の漢字数を下回る可能性があらう。書き下し文の漢字数をCkとし、原文の漢字数をCと置けば、両者のあひだには次のやうな関係が成立する。

Ck < C

むろん、右に掲げた四つの原則は一般的な了解事項にすぎず、殊に原則三は人によつて揺れが生じることもしくなくない。「べし」と訓ずる「可」を「可し」（助動詞ゆゑに、原則では「べし」）、「より」と読む「自」を「自り」（助動詞なので、原則では「より」）と書き下す人もあれば、「あり」と訓ずる「有」を「あり」（動詞ゆゑに、原則では「有り」）、「なし」と読む「無」を「なし」（形容詞なので、原則では「無し」）と書き下す人もある。とりわけ、「ごとし」と訓ずる「如・若」は、そのまま漢字で「如し・若し」（助動詞ゆゑに、原則では「ごとし」）と書き下す場合が少なくないだらう。ただし、そのやうな場合でも Ck < C といふ関係が成り立つことに変わりはない。

もし英語の整序問題との類似性に拘泥するのであれば、前述のごとく、復文作業は左のやうな条件付き整序問題と同様であると考へておけばよいだらう。本稿の冒頭で掲げた整序問題を例とすれば――

次の単語群を並べ換へて、日本文に意味が合致する英文を作れ。
ただし、必要な単語が二つ欠けてゐるので、自ら補ふこと。

友だちと一緒にパーティーに行きました。

friends, with, party, went, some, I

不足してゐる不定冠詞 <a> と前置詞 <to> を補つて I went to a party with some friends.> と記せば正解になる。むろん、不定冠詞

〈a〉の代はりに定冠詞〈the〉を用ゐても、正しい英文が得られよう。復文とは、かうした条件付き整序問題と同様の作業なのだ。

もつとも、英語では、冠詞を自ら復原する必要が生じて、不定冠詞〈a(n)〉か、定冠詞〈the〉か、それとも無冠詞かの三つの可能性に絞られる。しかし、復文において、書き下し文の原則二で省略された置き字を復原する場合は、選択肢の数が英語の冠詞よりも多い。代表的な置き字を想ひ起こすだけでも、次の八字が挙げられるだらう。

矣・于・焉・乎・乎・而・也・於

このうち、特に「于・乎・於」および「矣・焉」はそれぞれ判別が困難であるうへ、いづれも、語法・文法上、絶対に必要といふわけではない場面も多い。したがつて、復文の出題にさいしては、どうしても置き字に関する配慮が必要となる。

また、書き下し文の原則三で仮名書きに改められた漢字を復原するのも、なかなか難しい作業だ。日本語の助詞・助動詞を充てて訓ずる語について確たる知識がなければ、たうてい復原は不可能である。やはり代表的な文字を挙げておけば、次のやうになるだらう。

○日本語の助詞を充てて訓ずる語

格助詞「の」「之」「と」「与」「より」「自」「從

接続助詞「ば」「者

係助詞「は」「者」「や」「か」「也」「乎」「耶」

副助詞「のみ」「耳」「爾」「而已」「ばかり」「許」「可

終助詞「かな」「哉」「夫」「矣

間投助詞「や」「よ」「也」「乎

○日本語の助動詞を充てて訓ずる語

打消「ず」「不

受身「る」「らる」「被・所

使役「しむ」「使・令・遣・教・俾

可能「べし」「可

断定「なり」「也」「たり」「為

比況「ごとし」「如・若

右のやうな語を、書き下し文の仮名書きから漢字へと復原する可能性があるわけだ。かうした一覧表をあらかじめ提供しておかなければ、復文作業の準備としては不足を免れまい。

そして、置き字の場合と同じく、「より」が「自」なのか「從」なのか、「しむ」が「使」なのか「令」なのかなどについての判断がきはめて困難であるからには、かうした複数の語に復原され得る仮名書きの語について、復文の出題にさいし、それ相応の配慮をほどこす必要があるだらう。

復文が、書き下し文から原文を復原する作業である以上、右のやうな準備作業が必要なことを再認識しておかねばまるまい。すなはち、書き下し文の漢字数と原文の漢字数との関係を明確に把握し、どのやうな置き字が入り得るのか、仮名書きの語がいかなる漢字に復原され得るのかについて明確な知識がなければ、おいそれと復文作業に取りかかることはできないのである。正解を知つてゐる出題者としての有利な立場に甘えて、「ここには置き字として〈於〉ではなく〈于〉が入ります」だの、

「この〈しむ〉は〈使〉ではなく、〈令〉です」だのと、さも「於」と「于」や「使」と「令」を判別する秘法があるかのやうな虚仮威しの場当たり説明は、厳に慎まねばなるまい。体系的かつ論理的な説明ができなければ、復文作業の意義がどこかに消し飛んでしまふ。復文作業に漢字を組み合はせてゆくパズルもどきの面白さがあるのは事実だ。けれども、たまたま的中した面白さに頼るやうでは、復文練習の真面目は果たされないのである。

六 復文の指導法

さて、では実際に復文作業をどう指導すればよいのだらうか。もちろん、多大な時間をかけて大量の復文問題をこなせば、自づから復文の要領を会得できるだらう。いはゆる「習ふより慣れろ」式の指導である。しかし、現今の漢文教育の貧困に鑑みれば、たうてい乱取りを通じて自然に技を体得してゆくことは望めまい。どうしても簡にして要を得た指導が必要であり、そのためには、出題の形式を工夫して、問題を可能なかぎり体系化し、復文の要領をそれこそ要領よく指導せねばならぬ。なにしろ限られた時間のなかで「読む」ための復文練習を行はうといふのだ。あらゆる句形に目配りするやうな指導は、固より不可能である。当面、要点を大づかみにする類の指導法を開発するのが肝腎であらう。

(イ) 出題の形式

書き下し文を示して総字数を付記するのは、江戸時代以来の復文問題と同様である。総字数を付しておかないと、さまざまな復文が可能となり、正解が一つに決まらない。たとへば、次のやうな例である。

孔子は聖人なり。	(総字数)
孔子聖人。	四字
孔子聖人也。	五字
孔子者聖人。	五字
孔子者聖人也。	六字

同じ一文でも、最短四字、最長六字の復文が可能だ。むろん、このやうに多様な復文が可能である事実を示し、漢文の融通無碍なありさまを教へることもできる。ただし、かへつて学生が混乱するおそれもあるので、一般には総字数を指定するのが無難だらう。

もつとも、右の場合、総字数を五字とすれば、やはり二種の復文が可能となる。そのやうなときは、「第五字〓也」または「第三字〓者」と付記するか、「へ也」を用ゐるよ」あるいは「へ者」を使ふこと」と指示するか、なんらかの措置が必要となる。その煩を避けなければ、正解が一つに決まる四字もしくは六字を総字数として指定するしかない。

右のごとく一見して単純さうな一文でも、正解にばらつきが生じる可能性があるので、復文の出題には常に慎重さが要だ。万一、数へ違ひを犯して誤つた総字数を指定したりすれば、甚だしい混乱を引き起こす危険がある。

言ふまでもなく、総字数を指定するさいに格別の配慮が必要となるのは、置き字を含む原文や仮名書きの語を漢字に改める必要のある原文を復原させる場合である。かなり実力のある学生が対象であれば、総字数だけを示して、さまざまな復原の可能性を自ら模索させることもできようが、初学者が相手となればさうはゆかぬ。やはり、それなりに親切な

措置をほどこしておくほうがよいだらう。

置き字について最も親切なのは、どこに、どの字を置くかを指定しておくことである。たとへば――

敬して之を遠ざく。(計四字／第二字＝而)

右のやうに指定しておけば、「敬而遠之」と復原するのは容易だらう。

学生は「之を」と「遠ざく」の語順のみ考へればよいのだから。

むろん、些少とも学習が進み、置き字「而」の直前に接続助詞「て」を用ゐることが多いといふ知識が定着してくれば、左のごとく、置き字の位置を示すにとどめたり、または、置き字の種類のみを指定したりするのも一法だらう。

敬して之を遠ざく。(計四字／第二字は置き字)

敬して之を遠ざく。(計四字／置き字「而」を用ゐよ)

原文が長く、いろいろな置き字が必要となる場合には、第二節で紹介した『課蒙復文原文』の例に見られたやうに、「而二、矣一」のごとく指示することもできる。ただし、差し当たり、そこまで負担の重い長文の復原を課す必要はあるまい。

一方、仮名書きを漢字に改める必要が生じる場合は、先に示した一覧表さへあらかじめ配付しておけば、取り立てて指示を記しておかなくともよからう。たとへば、次のやうな例である。

我 善く浩然の氣を養ふ。(計七字／置き字ナシ)

書き下し文の漢字数が六字、原文の字数が七字であるから、自ら一字を付け加へねばならない。もし「置き字ナシ」との指示がなければ、左記のごとき復文も可能となる。

我善養浩然氣矣。／我善養浩然氣焉。

けれども、「置き字ナシ」との指示を記しておけば、特段の指示を付さずとも、自づから助詞「の」に注目し、それを「之」に改めることができるだらう。正解は――

我善養浩然之氣。

もちろん、例の一覧表を手にしてゐたとて、たとへば使役「しむ」の場合は、どの字を用ゐるべきか迷ふこととなる。これについては、次のやうに指定しておけば、紛れが生じない。

子路をして津を問はしむ。(計五字／「しむ」＝使)

安心して「しむ」を「使」に改め、左のごとく復文できる。

使子路問津。

かうした指定を外し、答へ合はせのさいに「令」または他の使役動詞でも許容するといふ方法でもよいだらう。

もつとも、「ばかり」については、「許」と「可」では語法が異なるので、いづれでも宜しいといふわけにはゆかない。解答を一つに絞るのであれば、「許」と「可」のどちらを用ゐるのか、あるいは「ばかり」の意を表はす字がどこに位置するのかを指示する必要がある。

項羽の卒、十万ばかり。(計七字／「ばかり」〓許)

↓項羽之卒、十万許。

項羽の卒、十万ばかり。(計七字／「ばかり」と訓ずる字は第五字)

↓項羽之卒、可十万。

ただし、「ばかり」を漢字に復するやうな練習は難度が高いので、取り敢へずは気にしなくともよいだらう。乏しい経験から見て、最も出現する頻度が高いのは「の」〓之および「しむ」〓使・令……くらゐか。出題にさいして、置き字さへ丁寧に指示しておけば、仮名書き語の漢字への変換については、さほど神経質になる必要はないと思はれる。

(ロ) 問題の体系化

初歩的な段階から始めて、しだいに難度を高くしてゆくとなれば、当然、字数は少から多へ、構文は易から難へと向かふこととなるが、最も肝要なのは、復文の手ほどきをする基礎問題である。学習時間が乏しいとはいへ、些少とも漢文に親しんでゐるやうな学生が多ければ、どこかで耳にしたことのある『論語』などの名句を練習課題にすることもできるだらう。しかし、実際、そのやうな望みは薄い。なにしろ、ほとんどの学生が「朋有り遠方より来たる、亦た樂しからずや」を一度も聞いたことがないといふのが、現今の実情なのである。まづたく信じられない

までの漢文教育の衰退だが、現実には現実だ。いきなり特定の句形を用ゐるやうな原文を素材として復文させても、たうてい学習効果は望めないだらう。

もつとも、まづは基礎中の基礎をとれば、それほど深刻に考へる必要はないのかもしれない。なぜなら、我々が日常に使用してゐる漢語を素材として、いくらでも復文の課題とすることができからだ。すなはち、常用漢語を文法的に分類して訓読をほどこし、その書き下し文を呈示して基礎問題とするのが、最も取りつきやすい導入となるのではなからうか。たとへば次のやうな具合である。

(1) 主述関係

a 名詞+動詞

地震ふ↓地震

日没す↓日没

b 名詞+形容詞

幸ひなること甚し↓幸甚

月明らかなり↓月明

(2) 修飾関係

a 形容詞+名詞

白き髪↓白髪

勇ましき者↓勇者

b 副詞+形容詞

甚だ大なり↓甚大

最も善し↓最善

c 副詞+動詞

快く諾ふ↓快諾

熟つら考ふ↓熟考

d 名詞(副詞化)+動詞

蛇のごとく行く↓蛇行

客として死す↓客死

(3) 並列関係

a 類義語の並列

学び習ふ↓学習
勉め強ふ↓勉強

b 対義語の並列

山と河と↓山河
飲むと食らふと↓飲食

(4) 動目関係

a 他動詞+目的語

人を殺す↓殺人
罪を犯す↓犯罪

b 自動詞+対象語

学に入る↓入学
場に出づ↓出場

(5) 認定関係

a 存在 力有り↓有力

風無し↓無風

b 否定 利あらず↓不利

未だ定まらず↓未定

常に非ず ↓非常

かうした二字熟語の復文練習に次いで、次のやうな三字熟語や四字成語を復文させてもよい練習になるだらう。

欠くべからず ↓不可欠

未だ曾て有らず↓未曾有

名有れども実無し ↓有名無実

傍らに人無きが若し↓傍若無人

右のごとき常用漢語の復文を通じ、漢文の基礎的な語順について了解

が得られたならば、次は構文を明確に理解させるべく、文型ごとに短文の復文練習をさせては如何だらうか。

(1) 主語+動詞

白雲 飛ぶ。↓白雲飛。

◇成分の追加⇨主語+動詞+副詞句

名声 諸侯に聞こゆ。↓名声聞於諸侯。

(2) 主語+動詞+補語

雨水 氷と為る。↓雨水為氷。

◇成分の省略①⇨動詞+補語

関中に王たり。↓王関中。

◇成分の省略②⇨主語+補語

補語⇨名詞 孔子は聖人なり。 ↓孔子聖人。

補語⇨形容詞 月明らかに星稀なり。↓月明星稀。

◇成分の追加⇨主語+補語+副詞句

霜葉は二月の花よりも紅なり。↓霜葉紅於二月花。

(3) 主語+動詞+目的語

敵軍 城門を破る。↓敵軍破城門。

落花 雪に似たり。↓落花似雪。

◇成分の省略⇨動詞+目的語(⇨副詞句)

天に敬み人を愛す。↓敬天愛人。

將軍に此に見ゆ。↓見將軍於此。

◇成分の追加Ⅱ主語＋動詞＋目的語＋副詞句

孔子 礼を老子に問ふ。↓孔子問礼於老子。

(4) 主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語

其の君 使者に車馬を賜ふ。↓其君賜使者車馬。

(5) 主語＋動詞＋目的語＋補語

人 我を才子と謂ふ。↓人謂我才子。

察していただけるとほり、右の文型の分類は、英語の五文型をそのまま適用したものである。実のところ、漢文では他動詞と自動詞の区別が明確でないため、第二文型と第三文型が截然と分かれぬ憾みが遺るもの、取り敢へずは区別して教へておくほうがわかりやすいだらう。第二文型で「動詞＋補語」の例として挙げた「王関中」（関中に王たり）を第三文型「動詞＋目的語」と考へることも、そして、第三文型で「主語＋動詞＋目的語」の例として掲げた「落花似雪」（落花 雪に似たり）を第二文型「主語＋動詞＋補語」として理解することも十分に可能なのだが。

むろん、旧来の漢文法の立場から見れば、かうした文型の教へ方には少なからぬ抵抗を覚えるだらう。なぜなら、漢文法では一般に補語といふ呼称を多用し、英文法でいふ前置詞の目的語たる名詞や二重目的語構文における間接目的語なども、すべて補語と呼んでしまふことが多い。右のやうに「前置詞＋名詞」を副詞句と称したり、間接目的語といふ呼

称を用ゐたりするのは、あまりに英文法に寄り掛かりすぎと映るかもしれない。

けれども、英語の五文型においてさへ甚だ曖昧な補語といふ文法用語——実際、補語の文法概念は明確さを欠き、主語でも動詞でも目的語でもない構文上の重要な要素を、便宜上、すべて補語と称してゐるのが実情ではないか——に、さらに異なつた意味合ひを持たせて漢文の文型を説明するのは、かへつて学生に無用な混乱をもたらすだけではないからか。現今の学生の脳裡において文法と言へば、その知識の大半は英文法に違ひない。日本語の口語文法はもとより、文語文法ですら英文法よりも占める領域は小さいだらう。その英文法の知識に基づいて、些少の齟齬には目をつむり、まづは大枠としての基本文型を教へるほうが得策なのではあるまいか。事実、右に示したごとく、漢文の基本文型は、ほぼ英語の五文型を以て覆へるのだ。たしかに、第二文型において動詞を省略した「主語＋補語」が可能である点で、漢文法は英文法と大きく異なる。しかし、この構文は、結果として日本語の構文にかなり近いので、学生にとつて理解しづらいものではない。可能なかぎり英文法を利用して漢文法を教へるのが、今日、最も効果的な教へ方だらう。そして、文型を明確に理解させるべく最も能率のよい練習こそ、ほかならぬ復文作業であらうと考へる。自ら手を動かし、単語や語句を文型に当てはまるやう並べ換へなければいけないのだから。

ざつと熟語や文型の復文練習が終はれば、あとは応用である。ただちに各種の句形を一つひとつ復文課題とし、仮定形・抑揚形・感嘆形など、漢文のさまざまな句形について確認してゆくのも一法だらう。

とはいへ、現今の情勢に鑑みるに、ただでさへ漢文を訓読する機会の少ない学生に対し、基礎の段階において、あれやこれや句形を示してみ

でも、実際に文章のなかで出逢ふことなど稀にすぎぬとなれば、ほとんど宝の持ち腐れに近い事態も容易に予想される。ここにおいて、基礎事項の復習をも兼ねた練習として効果的なのが、再読文字に関する復文作業であらう。再読文字の基礎事項さへ理解できてゐれば、すぐ次のやうな問題に取りかかることができるはずだ。

未だ来たらず。 ↓ 未来。

将来に來たらんとす。 ↓ 将来。

やはり常用漢語を素材とする。もちろん、左のごとき熟語も復文練習の課題となるだらう。「未」は常用漢語に少なからず出現するので、特に扱ひやすい再読文字だ。

未だ定まらず。 ↓ 未定。

未だ詳らかならず。 ↓ 未詳。

当に然るべし。 ↓ 当然。

かうした問題を導入として、その他の再読文字「且・応・宜・須・猶・盍」などを用ゐた書き下し文をも与へてゆけばよい。むろん、再読文字の読み方を確実な知識とするためにも有益な練習となる。

(ハ) 復文の要領

ここで、実際に復文を行ふさいの要領について述べておかねばなるまい。右のやうな基礎練習を終へてから、いざ、ある程度の長さの書き下し文を与へてみると、たいいていの学生は、基礎事項をどのやうに応用す

ればよいのかわからず、確たる方針もないまま、ただ書き下し文の漢字を適当に並べ換へようとする。限られた時間のなかで復文を身に着けさせるには、ぜひともあらかじめ要領を説明しておく必要があるだらう。江戸時代から戦前にかけて、あれだけ盛んに復文練習が取り込まれてゐたにも拘はらず、なぜか復文の要領を説明した字句はほとんど管見に入らない。それぞれの漢学塾でそれなりの説明が行はれることもあつたのかもしれないが、想像するに、大半は「習ふより慣れろ」式のやり方だつたのではなからうか。せいぜい例の格言「鬼と逢うたら返れ」を応用し、助詞「を・に・と」に出逢つたら上に返つて動詞を記せ、との教へがあつたかと想像できるくらゐだ。やはり、一問ごとに場当たりの説明に終始し、要領を体系的に説明することはなかつたのではあるまいか。唯一、復文の要領を解説する文章として管見に入つたのは、昭和三年(一九二八)に活字となつた新樂金橘「復文の要領」だ。文字どほり復文の要領を説いた一文で、今を去ること八十年前、復文がどのやうに考へられてゐたかを垣間見るにも恰好の資料である。

新樂は、まづ論文の冒頭で、従来の復文作業が粗雑きはまるものであつたことを強い口調で批判する。

何故に斯く復するか、其の理由も方法もなく、唯だ読書百遍して、常に口誦耳聞する類似の語句を、強ひて暗中に模索し、以て自然に之を能くするに至るといふも、尋常の語句の外は之を為す能はず、故に其の為し難きものに至りては、警句と称し、難句と呼びて、之を敬遠し、遂に為さざるに終る。是れ所謂入り易く進み難き復文法にして、世に碩学鴻儒を除きては、漢文を作るもの少なき所以なり。⁽³⁰⁾

この新樂の事実把握が正しいとすれば、やはり当時に至るまでの復文は、理論に裏打ちされた方法もないままに、いはゆる無手勝流で行はれてきたやうだ。記憶のどこかに類似の語句がなければ、正しい語順が得られず、ただちにお手上げの状態だつたのであらう。

もつとも、右に続けて「我が復文法は然らず、一語一句も皆悉く文法上より、其の位置を明示したれば、必ずしも字数を示すに及ばず、自ら字数を知りて、之を復文するを得るなり」と宣言するわりには、新樂の示す復文法は、納得しがたい混乱を残したままであり、かつ致命的な欠陥なしとせず、また自ら示した例題で自身が復文を誤つてゐることもある。

新樂は、主語に「1」、動詞に「02」、補語・客語・目的語に「3」、その他の語に「2」と数字番号を付し、漢文は「1 02 3」といふ構文から成るとする。なぜ動詞を「2」、その他の語を「4」としないのか、何も説明がないのでわからない。補語・客語・目的語の三者の区別も怪しげだ。ただし、補語とは「自動補語・他動補語・主格補語・賓格補語」の四種、目的語とは「前置詞の下に来る名詞、或は後置詞の上に来る疑問代名詞」の二種との由であり、一応の筋は通つてゐる。

けれども、単文の例題(八)で「時ハ金ナリ」を「時金也」と復し、「時」に「1」、「金」に「3」を付すのはよいとしても、「也」を不全動詞(いはゆる不完全動詞の意であらう)に扱つて「02」を付けてゐるのは納得できず、また当該三字が「1 3 02」といふ語順を取つてゐることについても何も説明を加へようとしなない。冒頭で一つの分析例として「今天下殆將定於一也」に分析をほどこしたさいには、末尾の「也」に「2」を付し、「助詞(或ハ動詞)」と記してゐるのだが。いつたい文末

の「也」が動詞で「02」なのか、それとも助詞で「2」なのか、まったく判然とせず、しかも、漢文は一般に「1 02 3」から成るとしながら、なら断りもなしに平然と「1 3 02」といふ分析を示してゐるのでは、読み手が混乱するばかりである。

また、復文の例題(五)で「三子ノ者ハ毎ニ夫子ノ説フ所ト為ラズ」を「三子者每不為夫子之所説」と復してみせるが、文中の「之」は、字数の指定がなければ、その有無は決められまい。「之」を入れずに「三子者每不為夫子所説」と復しても、漢文としては十分に成立する。先に引いたごとく、新樂は「必ずしも字数を示すに及ばず、自ら字数を知りて、之を復文するを得るなり」と豪語してゐるが、この例題(五)の解説を見ても、「之」を入れる文法上の必然性について一字も述べてゐない。そもそも必然性がないために解説不能といふのであれば、やはり字数の指定が必要なことを暗黙のうちに認めてゐることにならう。字数の指定を不要とするのは、新樂の復文法の致命的な欠陥と思はれる。

一方、新樂は、単文の例題(五)で「人、序ヲ余ニ請フ」を「人、請余序」と復してゐるが、これでは「人、余ニ序ヲ請フ」と訓読することになつてしまふ。正しくは「人、請序於余」くらゐか。書き下し文の語順から見ても、必ず「序」が「余」に先立たねばなるまい。もちろん、新樂の復文「人、請余序」の「余序」が誤植である可能性を疑ふ向きもあるだらう。しかし、新樂は、この例題(五)の解説で、「若し此の訓点をへ人、請余序。或はへ人、請余序」とせば誤る」と述べてゐる。復文された「余序」の二字が誤植によつて逆転したものとは考へにくい。かうした点でも、新樂の復文法には多大な不安を感じるのである。

ただし、新樂の説く復文の要領がまつたく頼りなく、すべて独り善がりに終始してゐるのかと言へば、実はさうではない。復文の要諦として、

参考にすべき点もある。それは、単文の例題(一)で「人が電車に乗る」を「人乗電車」と復して詳しい解説をほどこしたのち(新築によれば、この一文は「1023」すなはち「主語+動詞+補語」の構成であるといふ)、次のやうに述べてゐる箇所だ。

此の三語の復文は、是れ愚者が七年間を経て、完成したる千慮の一得にして、此の三語が毫釐を差へず……自由自在に復し得ば、復文の能率は卒れり。何如なる長篇章も井然として、我が掌中の篇章と成らむ。故に此の三語の復文を復文の秘訣として茲に特筆す。

「人が電車に乗る」を「人乗電車」と復してみせるだけで、これほどの自信を示すのは、いささか奇異に映るかもしれない。あまりに大げさだ、と。けれども、今日の訓読ならば決して「人が」のごとく主格の語に「ガ」を付けることはあるまいにとの不審を差し引いたとしても、この新築の豪語は傾聴に値する。

先に英語の五文型がそのまま漢文でも通用することを示した。しかし、復文の要領を簡潔に脳裡に置くには、五つの文型では多すぎる。そこで五文型を簡略化して要点を一つに絞るとすれば、やはり日本人が復文に臨むかぎり、日本語とは最も語順が相違する第三文型すなはち「主語+動詞+目的語」といふことになるだらう。右の新築の豪語は、これを説いてゐるものと考へればよい。新築は「人乗電車」を「主語+動詞+補語」すなはち第二文型と理解してゐるが、既述のごとく、漢文では第二文型と第三文型の区別が判然とせず、この「人乗電車」は「主語+動詞+目的語」とも解し得る。つまり、この第三文型さへ心得ておけば、他の文型はなんとかなるだらうとの見通しがつくわけだ。

第一文型「主語+動詞」は、第三文型の一部にすぎない。第二文型と第三文型の区別は曖昧。大ざっぱには、すべて第三文型と見なしても片が付く。注意すべきは、第二文型から動詞が省略された「主語+補語」が漢文では成立するといふ点だが、これについては、日本語の構文感覚をそのまま援用しても、過つ危険性は低いだらう。第四文型は第三文型の目的語が重なつたものにすぎず、第五文型も第三文型に補語が加はつただけだ。要するに、復文の要領としては、取り敢へず第三文型さへ大原則として念頭に置いておけばよいのである。かう考へれば、すつきりそのもの、あれやこれや煩雑な説明なしでも、要諦が明快に理解できるはずだ。

ただし、さすがに第三文型のみ的一本槍ですべての復文が可能といふわけにはゆかない。簡潔さを旨としつつも、さらに二つの要領を脳裡に納めておく必要がある。

第一は、「修飾語+被修飾語」の構造である。大きく分ければ「形容詞的修飾語+名詞」および「副詞的修飾語+動詞(形容詞・副詞または文全体など)」の二種であるが、これについての理解が欠けてゐると正確な復文はできない。この語順そのものは日本語の原則とまったく同じなのだが、実際に学生に復文を行はせてみると、特に後者すなはち副詞的修飾語の位置付けの不正確な例が目立つ。修飾語を被修飾語の後方に置いてみたり、修飾語を被修飾語に先立たせながらも両者のあひだに余計な語を入れてしまつたりするわけだ。とにかく漢文の修飾関係は上から下へと掛かる一方通行であること、そして修飾語と被修飾語は直接に結び付き、両者のあひだの距離は零であることを徹底して理解させねばならぬ。この「修飾語+被修飾語」構造さへ正しく処理できるやうになれば、復文の確度は飛躍的に高まるだらう。

第二は、英語の語順との連想である。またもや英語かと嫌ふ向きがあるかもしれない。けれども、差し当たり心得ておくべき要領として、英語で書いたとすればどのやうな語順になるかを考へ、それに合はせて漢文の語順を整へるといふ方法は、なかなか有効なのである。もちろん大原則「主語＋動詞＋目的語」そのものが英語の構造なのであるが、構文のみならず、その他の場面においても、もし迷ひが生じたときは、英文と漢文との語順の類似性を手がかりにしてみよ、といふわけだ。この英語との連想を適切に活用できるやうになれば、復文の難度が予想以上に低下することだらう。

簡略にまとめておけば、復文の要領は左のごとき三条となる。

甲 構文上の大原則は「主語＋動詞＋目的語」である。

乙 修飾構造は必ず「修飾語＋被修飾語」となる。

丙 英語で記した場合の語順を参考とせよ。

言ふまでもなく、この三条だけでは処理できぬ復文問題も枚挙に遑がない。特に一定の句形を用ゐた書き下し文については、その句形の特徴を成す語句および当該語句どうしの呼応関係を記憶しておかなければ、たうてい復文は覚束ないだらう。そもそも、句形については、一つひとつ読み方から丁寧に指導してゆくのが穩当といふものだ。いきなり復文問題を課して未習の句形を教へようとするのは、文字どほり乱暴な教へ方である。また、あらゆる句形の復文に共通する原則を打ち立てやうとしても、おそらく実際には不可能だらう。となれば、まづは、特定の句形が登場しない一般的な文章の復文を指導するのが上策だ。句形を含む復文作業は、学習が一定の水準に達したところで課すべき応用問題なの

である。

(二) 復文の実際

では最後に、いくつか例題を掲げて、実際に復文作業が行はれるありさまを御覧いただくことにしよう。以下の内容は、すべて私が実際に學生に課してゐる復文問題であり、また教室で指導してゐる復文の手続きである。

まづ構文感覚を磨かせるべく課してゐるのが、次のやうな比較対照問題だ。この種の問題は、思ひつくまま容易に作成できるだらう。

【例題1】比較対照問題①

白き馬。⇕馬白し。(いづれも計二字)

初めに書き下し文を語句に区切つて「白き／馬」「馬／白し」とする。それから語句どうしの関係を考へるわけだ。

「白き／馬」は、形容詞「白き」が名詞「馬」に掛かる修飾構造だ。したがつて、修飾語「白」を上、被修飾語「馬」を下に置き、「白馬」とする。

「馬／白し」は、主語の名詞「馬」に、述語として補語たる形容詞「白し」が付いてゐる構文だ。当然「馬白」と復原する。

このやうに復文を終へたら、「白馬」に返り点を打つて「馬白し」と訓読してはいけない理由、および同じく「馬白」に返り点を付けて「白き馬」と訓読してはならない理由を説明する。単純きはまる比較対照問題ながら、漢文の構造を確認するには有益な問題かと思ふ。

【例題2】比較対照問題②

甚だ幸ひなり。↑↓幸ひなること甚し。(いづれも計二字)

やはり、まづは書き下し文を語句ごとに「甚だ／幸ひなり」「幸ひなること／甚し」と区切る。

「甚だ／幸ひなり」は、副詞「甚だ」が形容動詞「幸ひなり」に掛かる修飾構造だ。したがって、修飾語「甚」を前に、被修飾語「幸」を後に置き、「甚幸」とする。

「幸ひなること／甚し」は、主語「幸ひなること」に、述語の形容詞「甚し」が補語として付いてゐる構文だ。むしろ「幸甚」と復原する。

そして、前問と同様、「甚幸」を「幸ひなること甚し」と訓読してはならぬ理由、「幸甚」を「甚だ幸ひなり」と訓読してはいけない理由を説明すればよい。

学生にとつては、形容詞を修飾語とする前問「白馬」よりも、副詞を修飾語とする本問「甚幸」のほうが、とまどふ比率が高いやうだ。殊に、語順を逆転した「幸甚」の送り仮名「なること」には抵抗を覚えるらしい。併せて、漢文における名詞化のための送り仮名「こと」についても簡略な解説を加へておく必要があるだらう。

【例題3】比較対照問題③

悠然として去る。↑↓去ること悠然たり。(いづれも計三字)

これは前問の類例で、「去る」といふ動詞を用ゐる点だけが異なる。同じく、まづは語句に区切つておく。

「悠然として／去る」は、「悠然として」が「去る」を修飾してゐるの

で、「悠然去」と復する。

「去ること悠然たり」は、「去ること」が主語、「悠然たり」が補語なので、「去悠然」と復せばよい。後者「去悠然」において、動詞「去る」が送り仮名「こと」によつて名詞化されるありさまが、容易に理解できるだらう。

例によつて、「悠然去」を「去ること悠然たり」と訓じてはいけない理由、「去悠然」を「悠然として去る」と訓じてはならぬ理由も説明しておきたい。

かうした比較対照問題をいくつかこなせば、自づから漢文の構文感覚が把握できるはずである。もつとも、まったく文法のわからぬ学生に右のやうな比較対照問題を課すと、なぜ同じ二字または三字の語順が逆転するのか一向に理解できず、ひたすら混乱を招く結果となるやうだ。英語の五文型や品詞機能が理解できなければ、やはり漢文の構造も理解できないのである。

比較対照問題は以上にとどめ、以下、ふつうの復文作業を四題だけお目にかけてよう。置き字については、最も丁寧と思はれる指示を記しておくのが好ましい。

【例題4】

顔淵死す。門人厚く之を葬らんと欲す。(計九字／置き字ナシ)

いささかなりとも文章が長めとなれば、まづは書き下し文の漢字数と総字数とを確認しておかねばならない。この問題では、書き下し文の漢字が九字、すなはち総字数と同じであるから、安心して作業に取りかかれる。たとひ「置き字ナシ」とはいへ、仮名書きの語句を漢字に復する

必要が生じる可能性もあるので、油断は禁物だ。

次は、例のごとく語句に区切る作業だが、これも安心して「顔淵／死す。門人／厚く／之を／葬らんと／欲す」と切れるだらう。

第一文は、主語「顔淵」と動詞「死す」であるから、たやすく「顔淵死」と復原できる。

それに比べると第二文は厄介だが、あわてて一気に復文しようと思わず、一つひとつ語句と語句との関係を確かめてゆくのが着実な方法だ。「門人」が主語であることは問題なからう。「厚く」は副詞として動詞「葬る」に掛かるので、両語が修飾構造を形成し、「厚葬」の語順となる。「之を」は動詞「葬る」の目的語だから、語順は「葬之」。末尾の「欲す」の処置に困る学生もゐるだらうが、ここで援用すべきが英語の語順の連想である。「欲す」は、英語ならば〈want〉に相当するはずだ。となれば〈want〉が不定詞〈to do〉を従へると同じく、「欲す」も欲する行為を後方に従へ、「欲葬」となるのではないか。かう連想が働けば、結局、主語「門人」の下に三つの二字「厚葬」「葬之」「欲葬」を矛盾なく組み入れればよいといふことになる。この条件を満たすには、「門人欲厚葬之」と並べるしかあるまい。つまり「顔淵死。門人欲厚葬之」が正解だ。

一瞬、「厚葬」と「欲葬」を組み合はせるときに不安が生じるかもしれない。「厚」と「欲」の二字をどう並べればよいのか、と。しかし、「厚葬」は修飾構造であり、先述のやうに、修飾構造においては一般に修飾語と被修飾語を切り離してはいけないといふ規則がある。したがって、「厚葬」はそのままとし、「欲」を「厚葬」の直前に置いて、「欲厚葬」の語順とすればよい。「欲葬」は、動詞「欲」が動詞「葬」を目的語として従へる「動詞十目的語」の関係なので、あひだに副詞「厚」が

割り込んでも差し支へないわけだ。

この問題を通じて、「死」にはナ変動詞「しぬ」ではなくサ変動詞「しす」を充てて訓読すること、また「欲十動詞」は「欲^スV^{セント}」と訓読することなども習得できるだらう。むろん、第二文にレ点・一二点を「門人欲厚葬之」と付けさせれば、返り点の練習にもなる。復文作業は、学習の素材として何かと役立つのだ。

【例題5】

千里を遠しとせずして来たる。(計六字／第五字＝置き字「而」)

書き下し文の漢字は四字で、総字数よりも二字少ないが、第五字が置き字「而」と指定されてゐるので、仮名書きの語を一字だけ漢字に改めればよいとの方針が立つ。そこで、暫く書き下し文をにらみつければ、打消の助動詞「ず」が「不」の訓らしいとの見当が付くだらう。これで六字がすべてそろふことになる。

これまた「千里を／遠しとせ／ず／して／来たる」と区切つて考へれば——名詞「千里を」は動詞「遠しとす」の目的語であるから、「遠千里」の語順になる。打消の助動詞「ず」は、漢文では否定の副詞「不」が動詞「遠しとす」を修飾する構造を取るの、「不遠」と復原できよう。「して」は置き字「而」の直前に接続助詞「て」を送つて訓読するとの約束に基づく語ゆゑ、「遠千里」と「不遠」を組み合はせた四字が「而」の上に位置するはずだ。当然、動詞「来たる」は「而」の下に入る。つまり「不遠千里而來」が正解だ。

本問をこなせば、ふつう日本語では形容詞「とほし」に訓ずる「遠」が動詞として「とほしとす」とも訓読できること、否定の副詞「不」が

動詞に冠せられること、「而」の直前に接続助詞「て」が付くこと、一般に「而」の上下にそれぞれ動詞が入ること（本問では「遠」と「来」、そして「来」にはカ変動詞「く」ではなく四段動詞「きたる」を充てて訓ずることなどが確認できる。これまた何かと有益な問題であらう。

【例題6】

父の臣と父の政とを改めず。（計九字／置き字ナシ）

漢字が五つしかない書き下し文について、総字数が九字と指定されてゐる。それでゐながら「置き字ナシ」といふのであるから、仮名書きの語を四つもの漢字に改めなければならぬ。末尾の打消の助動詞「ず」が「不」らしいとの予測はすぐに立つ。二つの「の」も、漢字「之」でなければ、たうてい総字数が満たされまい。残る一字が問題だが、助詞「と」の繰り返しから推して、例の並列形式「A₁とB₁」（AとBと）に想ひ到ることができれば、それで一件落着である。

右の並列形式さへ脳裡にあれば、敢へて語句を区切るまでもなく、「父の臣と父の政とを」は「父之臣与父之政」と復原できよう。それが動詞「改む」の目的語で、さらに動詞「改む」を「不」が否定するのであるから、正解は「不改父之臣与父之政」だ。

この問題は、一に並列形式「A₁とB₁」（AとBと）を習得することが狙ひである。なぜ並列形式に焦点を当てるのかと言へば、一般に並列形式は句形として扱はれず、扱はれたとしても使役形・受身形・反語形などの蔭に隠れてしまひ、強く意識されない危険性が高いからだ。これは由々しい事態であらう。英語に話を移せば、二つの要素A・Bを並列する〈A and B〉といふ表現を知らないに等しいことになる。かうした基

本中の基本事項を自ら手を動かして学ぶためにも、復文練習の意義は無視できない。

【例題7】

民の隣国よりも多からんことを望む無かれ。（計九字／第六・九字
置き字「於・也」）

書き下し文の漢字は六つ、総字数は九であるから、漢字が三つ足りな
い。そのうち二字は、第六字「於」・第九字「也」と置き字で占められ
てゐるので、残るは一字である。そこで仮名書きにされた漢字を探すべ
く書き下し文に目を凝らせば、助詞の「の」と「より」が候補に挙がる
だらう。ただし、「より」は、起点を表はす「より」であれば「自・從」
などの漢字を用ゐるが、比較の対象を表はす「より」は一般に送り仮名
となる。この問題の「より」は、どうやら後者らしいとの見当がつくだ
らう。すなはち「の」を「之」に復しさへすれば、漢字数は辻褄が合ひ
さうだ。

取り敢へず「民の／隣国よりも／多からんことを／望む／無かれ」と
語句を区切つて作業を始める。「民の」は、右に見たとほり「民之」と
復文する。同じく右で述べたやうに「隣国よりも」の「よりも」は送り
仮名であるから、何も触らない。ただし、比較の対象を表はす「於」が
第六字に位置するので、「隣国よりも」は第七字以下に入ることとなる。
また「多からんことを」は、英語で言へば比較級の形容詞であるから、
「於」に先立つはずだ。要するに、置き字「於」は英語の〈than〉と同
じやうな機能を果たすのである。これさへ心得てゐれば、語句の配置が
容易になるだらう。「望む」が上文「〜こと」を目的語とする動詞であ

ることは見やすい。末尾の「無かれ」をどこに置かかで少しまごつくかもしれないが、ここでも英語の連想を働かせることが大切である。「無かれ」を英語で記すと禁止命令〈Don't〉になりさうだとの見当がつけば、どうやら文頭に置くのが適切だと判断が下せよう。かうした語句の関係を組み合わせると、自づから「無望民之多於隣国也」といふ正解が得られる。文法上は「無望多於民之隣国也」と復文することも可能だが、これでは第六字に置き字「於」を記せとの指定に違反してしまふ。もし置き字の位置が指定されていなければ、文意から判断することになるのだが。逆に言えば、復文練習において、文法事項に専念させるべく、解答をすつきり一つに絞り込むには、やはり置き字の位置まで指定しておくが無難なのだ。

本問では、置き字「於」が比較の対象を表はす〈than〉と同様の機能を発揮すること、禁止命令「無かれ」が〈Don't〉と同じく文頭に冠せられることなど、英語との連想が重要な役割を果たす。もちろん、比較形や禁止命令について十分な指導を終へてからこの種の問題を与へるのが、最も親切な指導であらう。しかし、実際に、さうした時間の余裕があるかどうか。たとひ余裕がなくとも、英語の語順さへ連想できれば、本問のやうな復文練習も可能となるのである。英語の知識が漢文の知識をはるかに上回つてゐる現今、学生に対して英語を援用した指導を行ふのが一つの捷径かと愚考するのだが、果たして如何なものだらうか。

最後に、復文の指導法に関する愚案を簡略にまとめておかう。

A 導入として、次のやうな段階を踏む。

1 常用漢語を素材とする復文作業を課す。

- 2 英語の五文型を援用した文型習得のための復文作業を課す。
- 3 再読文字を用ゐた復文練習を課す。

B 復文の要領は、左記の三条とする。

- 甲 構文上の大原則は「主語＋動詞＋目的語」である。
- 乙 修飾構造は必ず「修飾語＋被修飾語」となる。
- 丙 英語で記した場合の語順を参考とせよ。

C 書き下し文は、次の要領で作成されたものを与へる。

- 一 原文にない漢字は書かない。
- 二 発音しない漢字すなはち置き字は省略する。
- 三 日本語の助詞・助動詞を充てて訓ずる語は仮名書きに改める。
- 四 再読文字は、初読（右傍の読み）に漢字を充て、再読（左傍の読み）を仮名書きとする。

D 出題に当たつては、総字数を指定し、置き字の位置と種類を明示する。

E 実際の出題は、次のやうな順序に従ふ。

- ① 比較対照問題を課し、文法事項を確認する。
- ② 特定の句形を含まぬ一般の復文問題を課す。

F 復文作業にさいしては、次のやうな手続きを踏む。

- ア 書き下し文の漢字数と、指定された総字数および置き字とを確認し、仮名書きの語から復原される漢字があれば、書き下し文を

検討して、どの語が漢字に復原されるのかを考へる。

イ 漢字に復原される可能性のある仮名書きの語について見通しが立てられるやう、あらかじめ一覧表を配付しておく。

ざつと右のごとくである。

ここまで掲げてきた例文や例題が、かつて行はれてゐた復文練習問題に比べて短すぎるのではないかとの疑念を持つ向きも少なくあるまい。ただし、愚見によるところ、たとへば一百字に及ぶ復文問題も、実は短文の積み重ねにすぎず、一つの文が百字から成る長文といふわけではない。すなはち、短文こそ復文の課題とすべきであり、少なくとも初歩の段階で長文の練習を課す必要はないと考へる。況や例外的な構文を持つやうな文章を練習対象とするのは、ほとんど愚行に近いだらう。着実な文法事項の確認を以て復文の趣旨とせねばなるまい。

心残りなのは、各種の句形に係る復文練習だ。しかし、上述のごとく、句形については一般化した原則が示せないのが実情だ。もし実行するとすれば、また実行する余裕があるならば、指導に当たる教員の裁量で、馴染みやすい句形から開始してゆくしかないだらう。私自身は、たいいてい使役形から指導してゐる。使役形の構文「使役動詞＋(人)＋動詞」が英語の使役構文〈make someone do〉に一致してをり、例によつて英語の知識がそつくりそのまま応用できるからだ。むろん、受身形から指導を始める教員がゐるも一向に差し支へあるまい。要は、体系的かつ文法的な指導ができるか否かだ。

もつとも、右に示したやうな復文の指導法が体系的と呼べるのか、十全な自信があるわけではない。差し当たり、このやうな具合で如何かとの提案である。唯一、自信があるとすれば、復文といふ練習方法の持つ

絶大な効果についてである。事実、勉強熱心な学生は、しばしば「復文のおかげで、漢文の構造がはつきり目に映るやうになりました」と言つてくれる。これは当然のことでもあらう。既述のとほり、英語の整序問題が英語力を養ふのに効果有りとすれば、同様の作業を行ふ復文練習にも高い効果が期待できるはずだ。この点だけは、揺るぎない自信を以て断言できるのである。

果たして、復文練習を漢文に欠かせぬ学習法として復活できるか否か。ぜひとも関係各位の惜しみなき御叱正と御協力を仰ぎたい。

注

(1) 伊藤東涯『刊謬正俗』(寛延元年(一七四八)刊) 附録「訳文法式」/ 十四 a。今、寛政七年(一七九五) 刊本(訓点付き)より引き、現代日本語の感覚に鑑みて、訓読に些少の変更を加へた。以下、伊藤東涯「訳文法式」については、すべて同じ措置を採る。なほ、当該「訳文法式」の字句は『古事類苑』文学部五「漢文」にも見えるが、末尾の一節を省いた抄録にすぎず、誤植もある。

(2) 山本北山『作文志叢』二 a、b。原書は漢字片仮名交じり文。今、ルビをも含めて片仮名を平仮名に改め、適宜に句読点を付した。ただし、ルビは適宜に省略して、訓読を示す数カ所の左傍ルビを通常の右傍ルビとし、仮名遣ひも正しく改めた。以下、山本北山『作文志叢』については、すべて同じ措置を採る。

(3) 皆川淇園「編」『習文録』初編・下巻/葛西欽「題言」一 a。原文は、漢字片仮名交じり文で、濁点を表記せず、読点のみを付す。今、片仮名を平仮名に改め、適宜に濁点を付け、一部の読点を句点に変へた。以下、葛西欽「題言」については、すべて同じ措置を採る。

(4) 同右書/葛西欽「題言」三 a。

(5) 注(1) 伊藤東涯「訳文法式」/ 十三 b、十四 a。

(6) 同右/十四 a。

(7) 同右/十四 b。

(8) 同右/十四 b。

(9) 同右/十四 b。

(10) 同右/十五 a。

- (11) 注(2) 山本北山『作文志叢』三aに「覆文と原文と照^{あは}せて見て、覆文の原文に且^そ吾する所あらば、心を小^こて其故を稽^き索し、通ぜざる所は人々相商議し、其れにても通ぜざれば先生に問ひ……」とある。
- (12) 同右書/二b。
- (13) 同右書/三b。
- (14) 同右書/三b。
- (15) 同右書/四a~五b。
- (16) 同右書/五b~六a。
- (17) 同右書/四a。
- (18) 国語漢文研究会「編」『中等漢文教科書』(明治書院、明治三十五年) 卷三/七b、八a「復文例 一則」。句読点および表記に若干の変更を加へた。
- (19) 現行の訓読で完了の助動詞を用ゐる頻度は低い。完了の助動詞「り」「たり」「ぬ」「つ」のうち、敢へて完了を表はすときに、サ変動詞・四段動詞に「り」を使ひ、また「得たり」「似たり」に「たり」を用ゐる程度である。あからさまに「ぬ」「つ」を送ることはない。ただし、「已矣乎」の固定した訓読「やんぬるかな」の「ぬる」は、完了の助動詞「ぬ」の連体形である。
- (20) 深井鑑一郎「編」『選定中等漢文』(宝文館、昭和二年/昭和三年訂正再版) 第五冊三四頁。
- (21) 注(1) 伊藤東涯「訳文法式」/十五a。「古文を熟す」の助詞「を」はママ、今なら「に」を用ゐるだらう。また「則」を置き字とし、直前に「くするときは」と補読するのも、現代の訓読様式とは異なる。今日ならば「……之を復せば、則ち……」と訓ずるところ。いづれも当時の訓読を偲ばせる読み方である。
- (22) 同右/十五a。
- (23) 同右/十五a~b。
- (24) 注(2) 山本北山『作文志叢』三a~b。
- (25) 注(3) 葛西欽「題言」三b。
- (26) たとへば、湯浅邦弘「編」『懷徳堂文庫の研究』2005共同研究報告書(大阪大学大学院文学研究科、平成十七年二月) 所収の湯城吉信「懷徳堂資料解題(17)」によれば、大阪大学が蔵する『懷徳堂文庫』の資料『袖園数記』『紫蘭叢』などに懷徳堂で和文漢訳の練習をしてゐたことを明確に窺はせる字句があり、「懷徳堂で和文の漢文訳の練習が行われていたことがわかる」(七五頁)といふ。これについては、執筆者の湯城氏から直接の御教示を辱くした。ここに記して衷心より謝意を表する。
- (27) 文部省「告示」『高等学校学習指導要領』(昭和三十五年十一月一日) 三一頁。
- (28) 鈴木直治『中国語と漢文』(光生館『中国語研究・学習双書』12、昭和五十年) 三八七~三八九頁。
- (29) 伊藤丈『仏教漢文入門』(大蔵出版、平成七年) 六九頁。
- (30) 「斯文」第十編第三号(昭和三年三月) 一六頁。
- (31) 同右/一六頁。
- (32) 同右/一九頁。
- (33) 同右/二二頁。
- (34) 同右/一八頁。